

令和4年度 調査研究（プロジェクト研究）

【研究の概要】

1人1台端末時代における新たな学校教育の在り方

【D班】

「児童生徒理解に関する研究」
－ICTの効果的な活用を手掛かりとして－



令和5年 3月
鹿児島県総合教育センター

【本研究で使⽤したアプリ等について】

本研究で使⽤したアプリ等は次のとおりです（アルファベット順に記載）。

AI テキストマイニング, AirDrop, Apple TV, e ライブラリ, GoodNotes 5, Google Classroom, Google ドライブ, Google Earth , Google フォーム, Google Jamboard , Google スライド, Google Meet, IPELA, iMovie, Keynote, ロイロノート・スクール（本誌ではロイロノートと表記）, Microsoft Excel, Microsoft Forms, Microsoft PowerPoint, Microsoft Teams, Mentimeter, NHK for School, Quizlet, Quizizz, Safari, Scratch, YouTube, Webex, Zoom

※ 本紀要に掲載されている、当センターのWeb サイトは、令和5年度以降に、新しいサイトへ移行予定です。

目 次

【研究の概要】

I はじめに	1
II GIGA スクール構想と「令和の日本型学校教育」から	
1 GIGA スクール構想とその目的	2
2 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた ICT の活用	2
III 昨年度の情報教育研修課の調査研究から	
1 情報活用能力の育成	5
2 1人1台端末による学習活動	7
3 1人1台端末による授業デザイン	9
4 令和3年度の情報教育研修課調査研究の成果と課題	14
IV 意識調査から	15
V 今年度の調査研究	17
◇ 引用・参考文献等	18

【D班の研究】

I 研究の目的	D-1
II 研究の内容	D-1
III 研究の実践	
1 「学校楽しいーと」における ICT の活用	D-2
2 「こころ便ポチッと」における ICT の活用	D-3
IV 研究のまとめ	
1 「学校楽しいーと」における ICT の活用の成果と課題	D-5
2 「こころ便ポチッと」における ICT の活用の成果と課題	D-5
3 今後に向けて	D-7
V 活用事例紹介	D-9
◇ 引用・参考文献等	D-16

○ 図表番号について

【研究の概要】と【各班の研究】を併せた構成となっています。
そのため、図表番号は、次のように表記しています。

- ・ 研究の概要：図1-O，表1-O
- ・ A班の研究：図2-O，表2-O
- ・ B班の研究：図3-O，表3-O
- ・ C班の研究：図4-O，表4-O
- ・ D班の研究：図5-O，表5-O

令和4年度 調査研究（プロジェクト研究）

【研究の概要】

1人1台端末時代における新たな学校教育の在り方



令和5年 3月
鹿児島県総合教育センター

I はじめに

令和元年に発表された GIGA スクール構想は、令和 5 年度に「1 人 1 台の学習用端末」の実現を目指していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって大きく前倒しされ、小・中学校（義務教育学校含む。）においては、令和 2 年度中に 1 人 1 台端末環境が実現することとなった。ところが、1 人 1 台端末環境をすぐに効果的な活用につなげることは容易ではなく、当センターにおいても学校現場から「どのように活用すればよいのか。」「どのような場面で活用すればよいのか。」など、不安や疑問が多く寄せられた。

そこで、令和 4 年度は、当センターで通常行っている各課の調査研究ではなく、全所体制で鹿児島県の GIGA スクール構想を推進するためのプロジェクト研究を行うこととした。当センター情報教育研修課が、令和 2・3 年度に「1 人 1 台端末時代における授業デザイン『GIGA スクール構想』の実現による学びのイノベーション」を研究主題に行った調査研究を基にし、研究主題を「1 人 1 台端末時代における新たな学校教育の在り方」として、学校現場のニーズや鹿児島県の教育的課題等も踏まえ、四つの班で研究を行った（図 1-1）。研究の班は、様々な学校の状況に寄り添った研究にするため、六つの課（企画課、教職研修課、教科教育研修課、情報教育研修課、特別支援教育研修課、教育相談課）のそれぞれの所員が教科等や係などの専門性を班の研究に生かすことができるよう、複数の課の所員で編制した。

また、令和 4 年度の当センターの研究は、先行研究ではなく、地域や学校の課題及び目標などに寄り添って研究する「実践研究」である。そのため、学校規模や ICT の活用状況などが異なる 24 校を研究協力校として委嘱し、学校における実践を中心とした研究になるようにした。

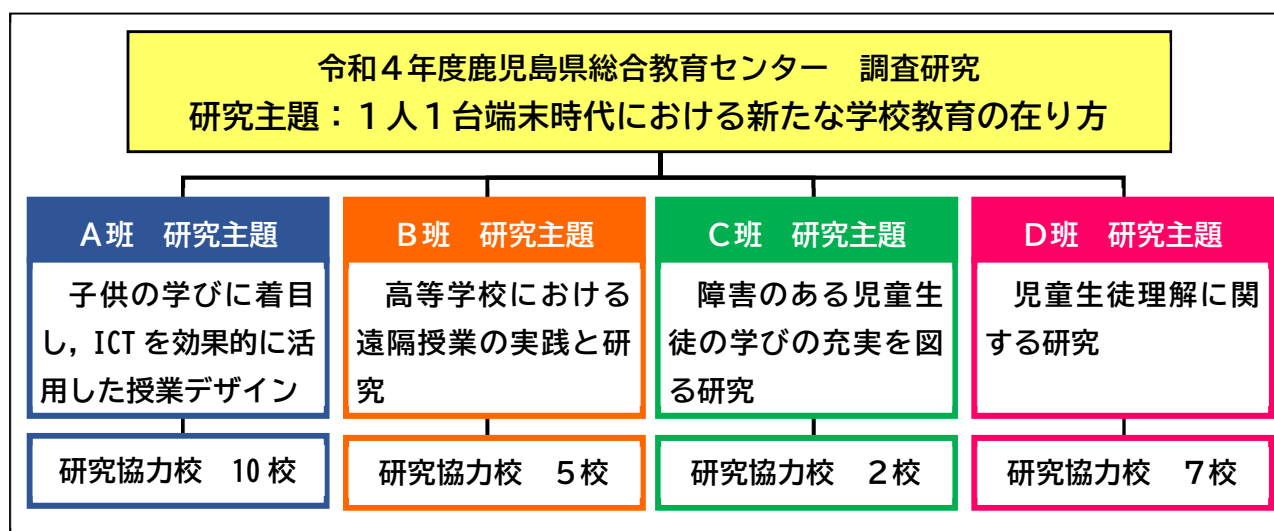


図 1-1 令和 4 年度鹿児島県総合教育センター調査研究全体像

実践研究のまとめとなる本紀要作成に当たっては、その内容を学校現場の先生方に広く周知するために、「実践を中心にした内容にすること」、「手に取りやすく、読みやすい資料にすること」などを趣旨とした構成にした。近い将来、今年度の当センターの実践研究、そして本紀要が、学校現場の方々にとって「当たり前のこと」となれば、それは鹿児島県の GIGA スクール構想が進んだ証である。その一歩として、各学校でそれぞれの実情に合わせながら、工夫して実践していただく際の参考となる一冊になれば幸いである。

Ⅱ GIGAスクール構想と「令和の日本型学校教育」から

1 GIGAスクール構想とその目的

GIGAスクール構想では、全国の学校現場で、1人1台端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するとともに、並行してクラウド活用推進、ICT機器の整備調達体制の構築、ICT活用の優良事例の普及、活用のPDCAサイクル徹底等を進めることで、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを全国の学校現場で持続的に実現させることを目指している¹⁾。そして、これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図ることにより、教師・児童生徒の力を最大限に引き出そうと構想している（図1-2）²⁾。

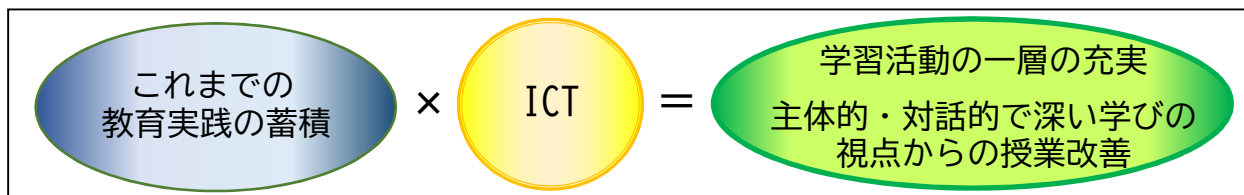


図 1-2 GIGA スクール構想による授業改善のイメージ

2 「令和の日本型学校教育」の構築に向けたICTの活用

(1) 今日の学校教育が直面している課題と今後の方向性

中央教育審議会では、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」³⁾（以下、答申と表記）に、現在の学校現場の課題と今後の方向性を次のように示している。

【課題】

- ・ 子供たちの多様化
- ・ 生徒の学習意欲の低下
- ・ 教師の長時間勤務による疲弊
- ・ 情報化の加速度的な進展に関する対応の遅れ
- ・ 少子高齢化、人口減少の影響
- ・ 感染症の感染拡大により浮き彫りとなった課題（子供たちの学習の機会の保障）

【方向性】

- ・ 学校教育の質と多様性、包摂性を高め、教育の機会均等を実現する。
- ・ 連携・分担による学校マネジメントを実現する。
- ・ これまでの実践と ICT との最適な組合せを実現する。
- ・ 履修主義・修得主義等を適切に組み合わせる。
- ・ 感染症や災害の発生等を乗り越えて学びを保障する。
- ・ 社会構造の変化の中で、持続的で魅力ある学校教育を実現する。

1) 文部科学省「GIGA スクール構想の実現」に関する補助事業の概要について（R2.1.16-17）
https://www.mext.go.jp/content/20200219-mxt_syoto01-000003278_505.pdf（2022年5月18日閲覧）

2) 文部科学省（リーフレット）「GIGA スクール構想の実現へ」
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf（2022年5月18日閲覧）

3) 中央教育審議会（R3.1.26）『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」

概要 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf（2022年3月24日閲覧）

本文 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2022年3月24日閲覧）

総論解説 https://www.mext.go.jp/content/20210329-mxt_syoto02-000012321_1.pdf（2022年4月22日閲覧）

(2) 「令和の日本型学校教育」における「子供の学び」の姿

急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力と、その育成におけるポイント、「令和の日本型学校教育」における「子供の学び」の姿は、答申⁴⁾に以下のように示している。

【急激に変化する時代】

- ・ 社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」
- ・ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」
- ・ 社会全体のデジタル化・オンライン化、DX*加速の必要性

* デジタル技術による変革（デジタルトランスフォーメーション）

【学校に求められていること（育むべき資質・能力）】

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること

- ・ 各教科等で育成を目指す資質・能力の育成
- ・ 言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成等

【ポイント】

- ・ これらの資質・能力を育むためには、**学習指導要領の着実な実施**が重要
- ・ これからの学校教育を支える基盤的なツールとして、**ICTの活用**が必要不可欠

【「令和の日本型学校教育」における「子供の学び」の姿】

※ 子供が自己調整しながら学習を進めていく。

ア **個別最適な学び**

○ **指導の個別化**

子供一人一人の特性・学習進度・学習到達度等に応じ、教師は必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行う。

⇒ 一定の目標を全ての子供が達成することを目指し、異なる方法等で学習を進める。

○ **学習の個性化**

子供一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、教師は一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行う。

⇒ 異なる目標に向けて、学習を深め、広げる。

イ **協働的な学び**

- 子供一人一人のよい点や可能性を生かし、子供同士、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働する。

⇒ 異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出す。

(3) 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた ICT の活用に関する基本的な考え方

答申⁵⁾では、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた ICT の活用に関する基本的な考え方を、以下のように示している。

- ・ 「令和の日本型学校教育」を構築し、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するためには、学校教育の基盤的なツールとして ICT は必要不可欠
- ・ これまでの実践と ICT を最適に組み合わせることで、教育の質の向上につなげていく必要があること。また、その際、PDCA サイクルを意識し、効果検証・分析を適切に行うこと
- ・ 情報活用能力など学習の基盤となる資質・能力を育む必要があること
- ・ 地理的要因や地域事情にかかわらず学校教育の質を保障すること
- ・ 災害や感染症等の発生などの緊急時にも教育活動の継続を可能とすること
- ・ 教師の長時間労働を解消し学校の働き方改革を実現すること

4)5) 中央教育審議会（R3.1.26）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2022年3月24日閲覧）

このように ICT はこれからの学校教育に必要不可欠なものであり、基盤的なツールとして最大限活用していく必要があるということを示すと同時に、その活用自体が目的でないことへの留意も必要であるとも述べている。また、「二項対立」に陥ることなく、これまでの実践と ICT との最適な組合せを実現するなど、どちらのよさも適切に組み合わせて生かしていくこと（図 1-3）が必要であるとも述べている。

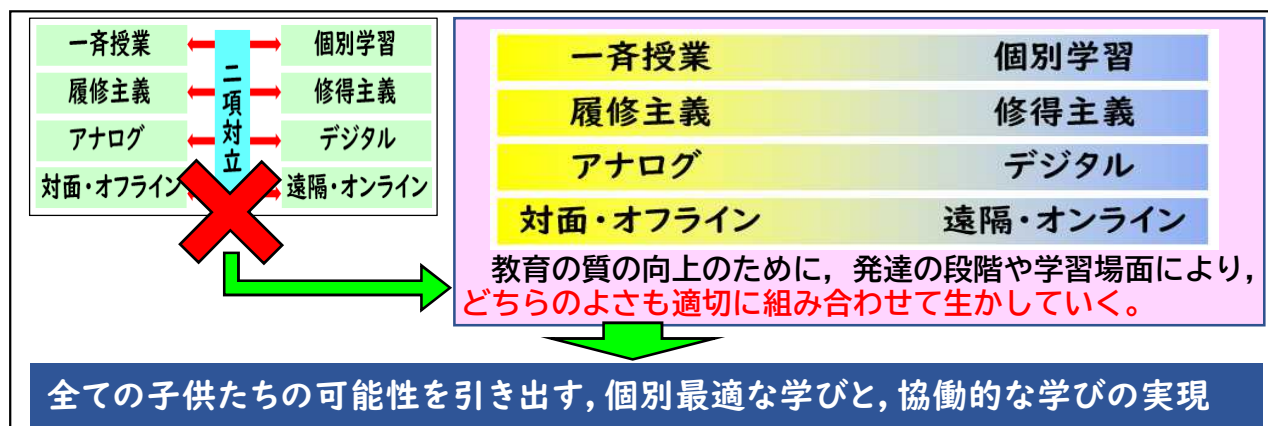


図 1-3 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた今後の方向性

このことを踏まえ、答申⁶⁾には、これまでの実践に新たな ICT 環境や先端技術を活用することによって、寄与することが可能となる例として、以下のことが挙げられている。

【全ての子供たちの可能性を引き出す、個別に最適な学びや支援の例】

- ・ 子供の学習状況に応じた教材等の提供により、知識・技能の習得等に効果的な学びを行うこと
- ・ 子供の学習や生活、学校健康診断結果を含む心身の健康状況等に関する様々な情報を把握・分析し、抱える問題を早期発見・解決すること
- ・ 障害のある子供たちにとっての情報保障やコミュニケーションツールとなること

【学びにおける時間・距離などの制約を取り払うことの例】

- ・ 遠隔授業により、学びの幅が広がる、多様な考えに触れる機会が充実する、様々な状況の子供たちの学習機会が確保されるなど、場面に応じた学びの支援を行うこと

(1)～(3)を可能とするためには、9年間を見通した義務教育の在り方、新時代に対応した高等学校教育や特別支援教育の在り方などについて考え、新しい時代の学びを支える必要がある。例えば、「資質・能力の育成」、「義務教育段階における特別支援教育のより一層の充実や学校間の適切な引継」、「心身の状況の変化への早期の気づきやエビデンスに基づく個別最適な指導・支援の充実」など、当センターにおいてこれまで取り組んできた研究や実践と ICT とのベストミックスを図ることも新しい時代の学びを支える手立てとして考えられる。また、少子高齢化が急速に進展していることで、公立高等学校の立地が0ないし1である市町村は、全国でも6割を越えている現状があり、鹿児島県においても同様の傾向がある。地域に教育の機会を残すことと特色・魅力ある教育を実現することを両立させるなどの学校教育の維持とその質の保障に向けた取組、災害や感染症の発生等の緊急時における学習の継続などのためには、遠隔教育についての研究も進めていく必要がある。

6) 中央教育審議会（R3.1.26）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2022年3月24日閲覧）

Ⅲ 昨年度の情報教育研修課の調査研究から

当センター情報教育研修課では、令和２年度から２年間にわたり、「１人１台端末時代における授業デザインー『GIGA スクール構想』の実現による学びのイノベーションー」を研究主題として調査研究を進めてきた。ここでは、今年度の調査研究に係る内容のみを示す。

１ 情報活用能力の育成

(Ⅰ) 「学習指導要領」，「教育の情報化に関する手引」に示される情報活用能力

情報活用能力は、これからの時代を生き抜く全ての子供たちに必要とされている。

学習指導要領では、「情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。」としている。

児童生徒に知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを目指すに当たって、情報活用能力を、「知識及び技能」の習得と、「思考力，判断力，表現力等」の育成，「学びに向かう力，人間性等」の涵養という，資質・能力の三つの柱に沿って次の図1-4のように整理している（「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編⁷⁾」及び「中央教育審議会答申（平成28年12月）別紙３－１⁸⁾」を参考に作成）。

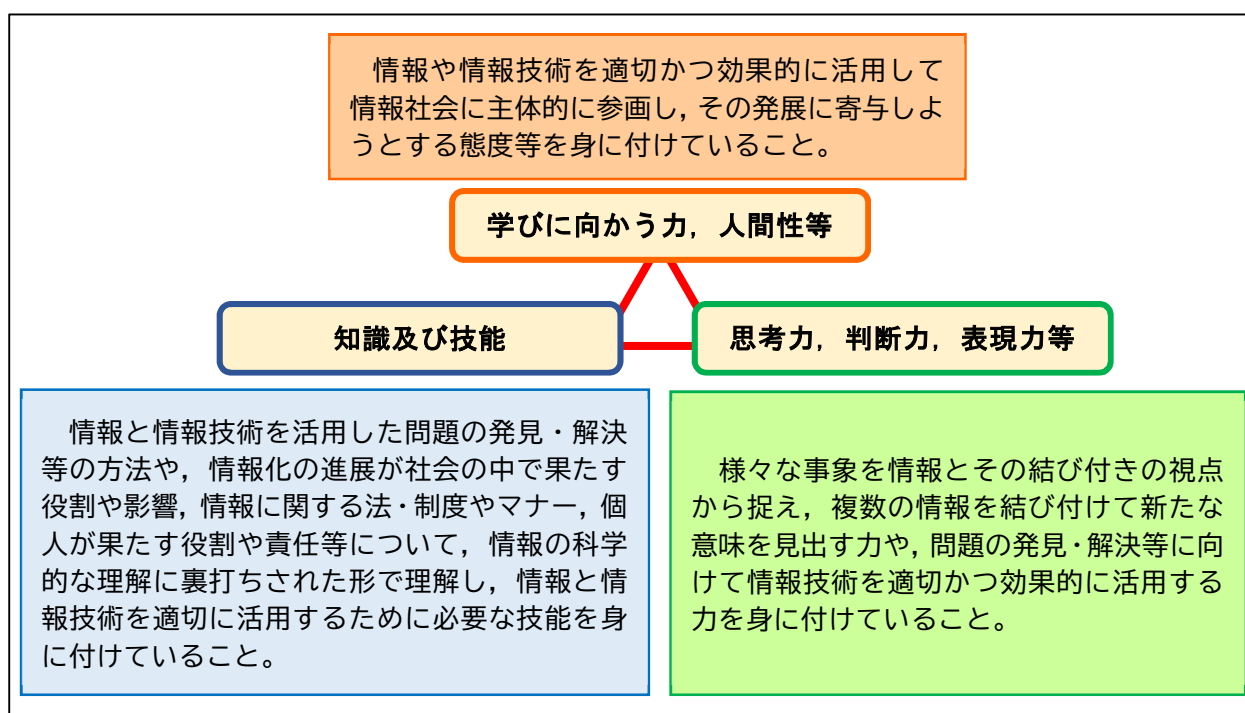


図 1-4 情報活用能力を構成する資質・能力

このように、情報活用能力は、全ての教科等において、それぞれの特質に応じ、情報技術を適切に活用した学習活動の充実を図りながら、バランスよく育成することが求められている。

7) 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編」
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf（2021年7月23日閲覧）

8) 中央教育審議会 答申（平成28年12月）別紙３－１
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_2.pdf
（2021年7月23日閲覧）

また、「教育の情報化に関する手引」（以下、手引という。）は、平成2年7月に、教育の情報化に関する初めての手引書として作成された。その後、時代に対応する改訂が行われ、現在は令和元年12月に、学習指導要領の改訂の趣旨に合わせる形で全面的に改訂し、令和2年6月には、追補版⁹⁾が出されている。

学習指導要領において、初めて「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力と位置付け、教科等横断的にその育成を図るようにしたことを受け、情報教育や各教科等の指導におけるICT活用など、教育の情報化に関わる内容の一層の充実が図られることとなった。併せて、GIGAスクール構想も推進される中、教育の情報化の中でも重要度が増した「情報活用能力の育成」が優先順位の高い位置に掲載されている。また、「デジタル教科書」、「遠隔教育」、「先端技術」、「健康面への配慮」などについても新たに内容が加えられるとともに、各学校段階・各教科等におけるICTを活用した指導の具体例も掲載されている。この中で、情報活用能力は、「学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力」として、文部科学省委託事業「次世代の教育情報化推進事業『情報教育の指針等に関する調査研究』」（以下、IE-Schoolという。）を手掛かりに指導項目の分類や系統が体系的に整理されている。

(2) 系統的な情報活用能力の育成（当センター版情報活用能力体系表の作成）

IE-Schoolでは、情報活用能力の育成に関わる事例を学習内容の観点から4分類に整理し、「想定される学習内容（情報活用能力育成のための想定される学習内容）」と位置付けている。また、手引（追補版）では、IE-Schoolにおける実践・研究を踏まえて、情報活用能力を、資質・能力の三つの柱に沿って複数の項目に区分・分類して整理している（IE-Schoolにおける実践・研究を踏まえた情報活用能力の例示）。さらに、これらを組み合わせ、要素ごとに発達の段階等を踏まえた、小学校（低・中・高学年の3段階）、中学校、高等学校の5段階のステップをつなぐイメージの体系表例を「【情報活用能力の体系表例(IE-Schoolにおける指導計画を基にステップ別に整理したもの)】（令和元年度版）全体版」¹⁰⁾として示している。

当センターでは、IE-Schoolと手引（追補版）を参考にして、令和2年度に三つの資質・能力のうち「知識及び技能」に関することについて、児童生徒が身に付けるべき情報活用能力一覧表として整理（小学校低学年から中学校までの4段階）した。ここでは特に、情報活用の実践力に欠かせないコンピュータ（タブレット端末）の基本的な操作から応用的な操作に至る能力（スキル）を具体的に示すとともに、プログラミング教育に関連した項目を明示するようにした。このように、実際の指導により生かしやすいよう、内容項目を精選し、「児童生徒が身に付けるべき情報活用能力一覧表」として、再構成した（表1-1）。詳しくは、当センターWebサイトの児童生徒が身に付けるべき情報活用能力一覧表①～③を参照してほしい。



児童生徒が身に付けるべき
情報活用能力一覧表①～③

9) 文部科学省（令和2年6月）「教育の情報化に関する手引-追補版-」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html（2020年9月3日閲覧）

10) 文部科学省（令和元年）「情報活用能力の体系表例(IE-Schoolにおける指導計画を基にステップ別に整理したもの)（令和元年度版）全体版」

https://www.mext.go.jp/content/20201014-mxt_jogai01-100003163_005.pdf（2020年9月3日閲覧）

表 1-1 児童生徒が身に付けるべき情報活用能力一覧表①（当センター版）の一部
（三つの柱で整理した資質・能力のうち「A 知識及び技能」に関すること）

分類	小学校低学年（ステップ1）	小学校中学年（ステップ2）	小学校高学年（ステップ3）	中学校（ステップ4）
基本的な操作等	・ペイント系アプリケーションの基本操作（ソフトキーボードでのかな入力、印刷含む） ・カメラ機能（撮影）の基本操作	・キーボードによる文字の正しい入力（単語、短文）、（ローマ字入力） ・画像・映像編集の基本操作、簡単なプレゼンテーションの作成（データのコピー、切り取り、貼り付け）	・キーボードによるローマ字入力で、ある程度の速さ（1分間に50文字程度）で文章の入力（漢字変換） ・目的に応じたアプリケーションの選択と操作、効果的なプレゼンテーションの作成（画像・映像編集の応用的な操作を含む）	・キーボードによる十分な速さ（1分間に80文字程度）で正確な文章の入力 ・目的に応じた適切なアプリケーションの選択と活用、受け手のニーズに応じたプレゼンテーションの作成
知識及び技能	※物事の順序の流れ図を使って説明（アンブラグド・プログラミング） （アンブラグド・プログラミングにより、朝の会や掃除、行事への取組等を例に） ・大きな事象の分解と組み合わせの体験 ・基本的な問題解決の手順	※Scratchなどのビジュアル・プログラミングの基礎 （ビジュアル・プログラミングの基本的な命令を組み合わせ、総合的な学習の時間の探究課題を追究する中で） ・単純な繰り返し・条件分岐などを含んだプログラムの作成、評価、改善	※Scratchなどのビジュアルプログラミングの応用、ビジュアルプログラミングの基礎 （ビジュアルまたはフィジカルプログラミングの応用的な命令を組み合わせ、小5算数「正多角形」と小6理科「電気のはたらき」の学習で思考を深めるために） ・意図した処理を行うための最適な（データや変数などを活用した）プログラムの作成・評価・改善	※計測・制御とネットワークを利用した双方向性のあるプログラムの制作【技術・家庭科（技術分野）】 ・問題発見・解決のための安全・適切なプログラムの制作、動作の確認及びデバッグ等【技術・家庭科（技術分野）】
問題解決能力	・身近なところから様々な情報を収集（身近な人への聞き取りや、教科書、インターネットなどからの効果的	・調査や資料等による基本的な情報の収集（自身の力で、他者への聞き取りや図書館資料などからの効果的	・調査や実験・観察等による情報の収集（情報メディアからの情報の収集と検証	・調査の設計（情報通信ネットワークなどからの効果的

2 1人1台端末による学習活動

GIGAスクール構想により、1人1台端末の環境が整い、学校教育における様々な場面での活用による学びの充実が求められている。また、GIGAスクール構想においては、個人のアカウントを利用したクラウドサービスの活用が勧められている。1人1台端末や個人のアカウントの活用により、学習活動の幅が大きく広がることが期待できる。そこで鹿児島県では、全児童生徒と教職員に1人1アカウントを付与し、活用を推進している。教科等の特徴や活動場面によって、効果的な活用の方法は異なる。そのため、どのような活用が効果的であるかについては、まずは様々な場面で活用し、その効果を実感することが効果的な活用の第一歩となる。以下に1人1台端末環境と1人1アカウントで実現できることを整理する。

(1) 1人1台端末環境になって実現できること

文部科学省は、1人1台端末環境が整備・活用されることで、図1-5のような学びの変容が期待できる¹¹⁾と示している。

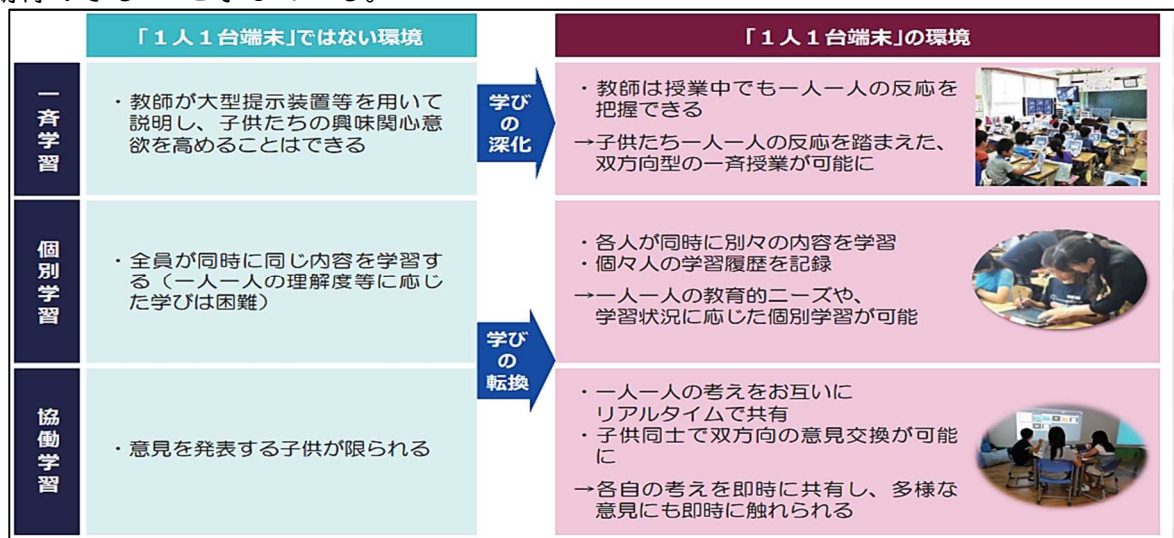


図 1-5 1人1台端末環境により期待される学びの変容

11) 文部科学省（リーフレット）「GIGA スクール構想の実現へ」
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syofo01-000003278_1.pdf（2020 年 9 月 3 日閲覧）

(2) 1人1アカウントを併せて活用することで実現できること

ア 1人1アカウントで実現できること

1人1アカウントを活用することで、全ての学習で使用するデータを個人で管理できるようになるだけでなく、双方向での情報共有や交流など、これまで行ってきた様々な学習活動を効率的に実現することが可能となる（図1-6）。以下にその例を挙げる。

- ・ 配布資料、家庭学習課題、成果物等が蓄積され、いつでも閲覧・活用が可能
- ・ オンライン学習（オンライン授業、テストや家庭学習課題の配布・自動採点等）の実現
- ・ 教職員側が児童生徒の学習状況をリアルタイムで把握・確認
- ・ 学級全体又はグループごとのファイル作成・同時編集などの協働的な学習の実現
- ・ どの端末でも自身のクラウド上のファイルにアクセス可能（端末を固定しない。など）
- ・ ネット環境があれば、学校だけでなく家庭や外出先等どこからでもアクセス可能
- ・ 学習履歴をクラウド上に蓄積し、いつでも振り返ることが可能

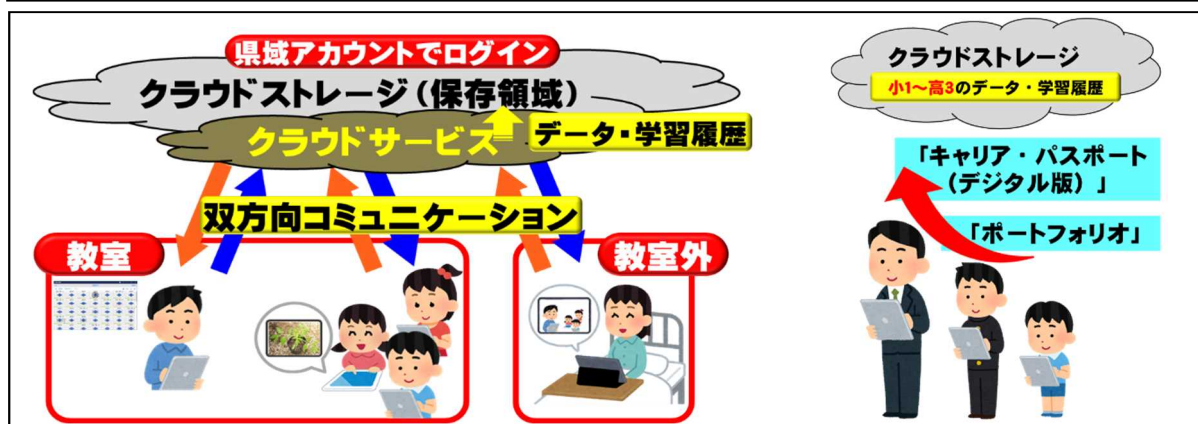


図1-6 県域アカウントを活用した学習活動のイメージ

イ 県域アカウントの運用で実現できること

アカウントを付与するに当たって、まず鹿児島県の教育用ドメイン（@kago.ed.jp）を取得し、全県下の公立学校で利用できる個人アカウントを作成した。それによって、児童生徒は小学校入学から高等学校卒業まで進学や転校があった場合でも学習履歴を、教職員は採用から退職まで異動があった場合でも授業等のデータを活用し続けることができるようになった（図1-7）。

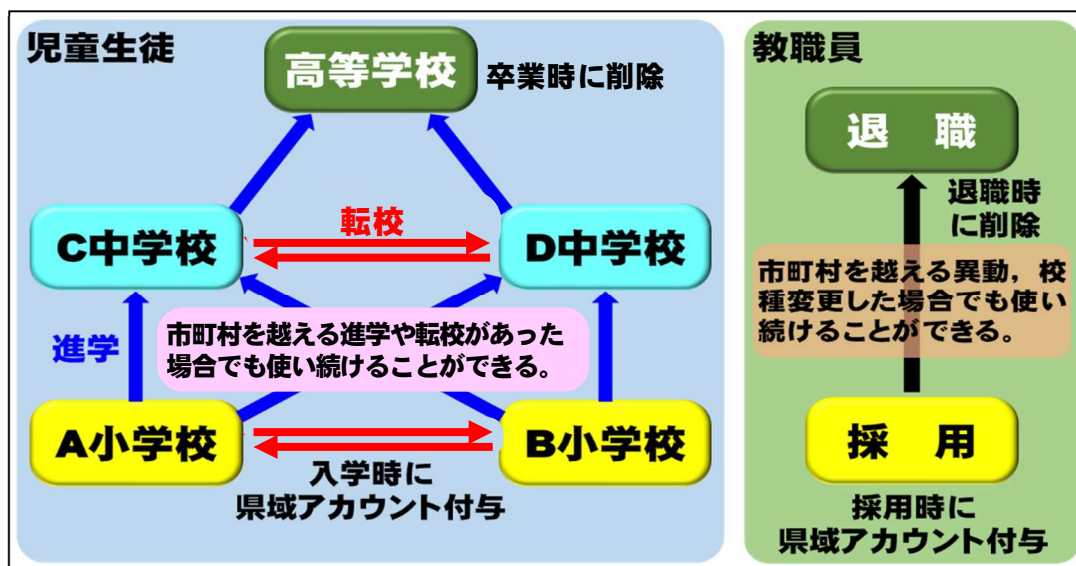


図1-7 県域アカウント運用のイメージ

(3) 教職員のマインドセットチェンジ

1人1台端末を活用し、多様な学びが実現できる環境が整ったことで、今後は、知識の伝達だけであれば、オンデマンドの動画コンテンツによる代替も可能となる。これからは、児童生徒の学びに向かう力を喚起し、身に付けた知識・技能を駆使して思考・判断しながら課題を解決し、結果を発信する学習活動へ転換するために、「児童生徒が自ら学び取る学習を支援する」ことが求められる。しかし、デジタルネイティブと言われる児童生徒と比べてICT活用に苦手意識をもつ教職員が少なくないのも事実である。

ICTは、教職員が全て理解し、十分に活用できるようになってから児童生徒に使用させていては、活用が進んでいかない。これまでも、運動や演奏等で得意な児童生徒が代表として演示していたように、操作等が得意な児童生徒が活躍する場面を設定しつつ、共に操作方法を習得しながら活用を進めていくなど、教職員のマインドセットチェンジも求められている(図1-8)。



図1-8 教職員のマインドセットチェンジのイメージ

3 1人1台端末による授業デザイン

(1) 授業デザインにおけるICT活用の基本的な考え方

「教育振興基本計画」(平成30年6月15日閣議決定)¹²⁾の今後5年間の教育政策の目標と施策群の「目標17 ICT利活用のための基盤の整備」の中で、以下のように述べている。

初等中等教育段階について、①情報活用能力(必要な情報を収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力(ICTの基本的な操作スキルを含む)や、情報の科学的理解、情報社会に参画する態度)の育成、②主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に向けた各教科等の指導におけるICT活用の促進、③校務のICT化による教職員の業務負担軽減及び教育の質の向上(後略)

ICT活用には、①の児童生徒の情報活用能力の育成という学習内容としての側面と②の各教科等の指導におけるICT活用(教員や児童生徒のICT活用)という学習手段としての側面がある。今後は、ICTを効果的に活用して学びを深め、教科等の目標を達成すると同時に、児童生徒の情報活用能力を育成することも求められている(図1-9)。

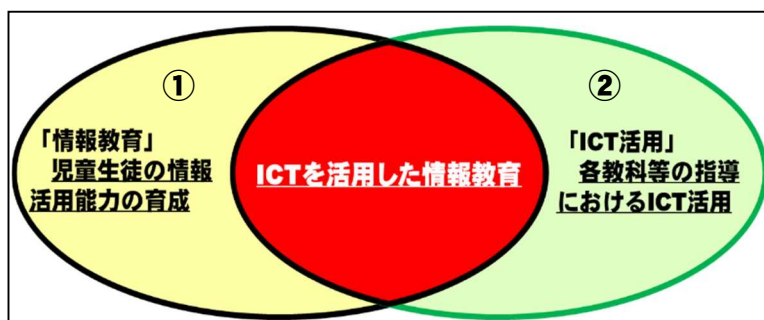


図1-9 情報教育の概念図

12) 第3期教育振興基本計画(平成30年6月15日閣議決定)
https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf (2021年7月23日閲覧)

(2) 教科等の指導におけるICT活用の特性・強み

教科等の指導におけるICT活用の特性・強み¹³⁾は表1-2のように整理されており、これらを主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につなげることが期待される。

さらに、教科等に関する個別の知識及び技能は、「問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと」や「情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと」といった学習経験の中で定着し、既存の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付いていくことなどが想定されている。このような学習過程において、情報収集し、試行して整理・分析し、情報共有を図り、表現をするといったあらゆる学習場面において、ICT活用の特性・強みを生かすことが期待される。

表1-2 ICT活用の特性・強みとそれらを生かすことが期待される活用

ICT活用の特性・強み	特性・強みを生かすことが期待される活用
多様で大量の情報を収集、整理・分析、まとめ、表現することなどができ、カスタマイズが容易である。	・ 文書の編集 ・ 表やグラフの作成 ・ プレゼンテーション ・ 調べ学習 ・ 試行の繰り返し ・ 情報共有
時間や空間を問わずに、音声・画像・データ等を蓄積・送受信でき、時間的・空間的制約を超える。	・ 思考の可視化 ・ 学習過程の記録 ・ ドリル学習
距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやり取りができるという、双方向性を有する。	・ 瞬時の共有 ・ 遠隔授業 ・ メール送受信等

(3) 授業デザイン時におけるICT活用の視点

授業でのICT活用には、教職員による活用と児童生徒による活用の二つがある。授業をデザインする際には、児童生徒の学びにとって最も効果的な活用の仕方考えることが大切である。授業をデザインする際に意識しておきたいICT活用の視点の基本的な考え方を表1-3のように整理する¹⁴⁾。

表1-3 授業デザイン時におけるICT活用の視点

	教職員によるICT活用	児童生徒によるICT活用
目的	◎ 各教科等の目標達成 教職員自身が、下記の視点でコンピュータやプロジェクトなどを活用して効果的な提示などを行う	◎ 児童生徒の情報活用能力育成 児童生徒が、下記の視点でICTを活用して課題を解決する
活用の視点	ア 学習に対する児童生徒の興味・関心を高めるための活用 イ 児童生徒一人一人に課題を明確につかませるための活用 ウ 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりするための活用 エ 学習内容をまとめる際に児童生徒の知識の定着を図るための活用	ア 情報を収集したり、選択したりするための活用 イ 自分の考えを文章にまとめたり、調べたことを表や図にまとめたりするための活用 ウ 分かりやすく発表したり、表現したりするための活用 エ 繰り返し学習や個別学習によって、知識の定着や技能の習熟を図るための活用

13) 文部科学省（平成 28 年 7 月 28 日）「2020 年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」最終まとめ
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/07/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375100_01_1_1.pdf
 （2021 年 7 月 23 日閲覧）

14) 文部科学省（平成 22 年 10 月）「教育の情報化に関する手引」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm（2020 年 9 月 3 日閲覧）

(4) 授業デザイン時におけるICT活用の基本的な考え方

ア ICTの特性・強みを生かした活用

- ・ アナログとデジタルのどちらのよさも生かした適切な組合せ
- ・ 適したタイミングや活動場面における活用
- ・ 発問・指示・説明との組合せ（効果的な提示）
- ・ 「板書」との連携（構造的板書の一部としての、ICT機器による一時的な表示）

イ ICTを効果的に活用するための学習場面の分類

各教科等においてICTを活用する際には、学習過程を踏まえることが重要である。各教科等において育成すべき資質・能力を見据えた上で、各教科等の特質やICTを活用する利点などを踏まえ、ICTを活用した効果的な授業をデザインしていく際は、「ICTを活用した指導方法（学びのイノベーション事業実証研究報告より）」の「学習場面に応じたICT活用事例¹⁵⁾」（図1-10）に示された分類を参考にとよい。



図1-10 「学習場面に応じたICT活用事例」

ウ 端末活用モデル「しら・とる・つく・とる」



ICTを効果的に活用して主体的・対話的で深い学びにつながるようデザインした授業を行う際、効果につなげるためには児童生徒の端末活用がスムーズにいくことも大きな要因となる。そこで、「情報活用能力体系表」、「授業デザイン時におけるICT活用の視点」、「学習場面に応じたICT活用事例」等を児童生徒の立場から「端末活用モデル『しら・とる・つく・とる』」としてまとめた（図1-11）。これは、

児童生徒が日常的に活用できるよう構成している。日常的な活用をまず始めてほしいことと、この活用モデルが児童生徒の端末活用の全てではないということから、この活用モデルが基本となるように「はじめの一步」としてまとめている。

15) 文部科学省（平成 29 年）「ICT を活用した指導方法（学びのイノベーション事業実証研究報告より）」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/14/1408183_4.pdf（2020 年 9 月 3 日閲覧）



図1-11 端末活用モデル「しら・とる・つく・とる」

(5) 「授業デザイン時におけるICT活用の視点」を明確にした授業の実践

各教科等で、1人1台端末を活用した授業を行うには、どのように授業デザインを行えばよいか検証授業を行い、実践を通して研究することとした。

ア 研究の視点の検討

- ・ 1人1台端末の環境下において、どのような学び（授業）が実現できるか。
- ・ 「GIGAスクール構想」における情報活用能力の育成は、具体的にどのように進めればよいか。

イ 実践研究内容の検討

- ・ 「GIGAスクール構想」における授業を想定したものになっているか。
- ・ 児童生徒の情報活用能力の育成を図ることを目的としたものになっているか。

ウ 検証授業の目的

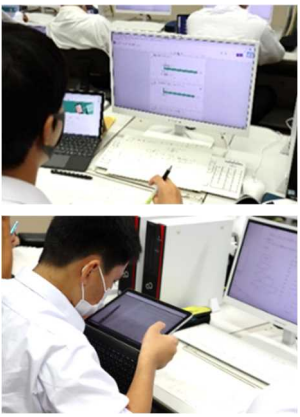
研究主題である「1人1台端末時代における授業デザイン」の課題解決につなげる。

エ 検証授業の視点

- ・ 「GIGAスクール構想」における授業を想定したものになっているか。
- ・ 児童生徒の情報活用能力の育成を図ることを目的としたものになっているか。
- ・ 全ての学校において、基本的に実現・実施可能なものとなっているか。
- ・ 小学校と中学校、高等学校の学習内容が関連的、体系的なものとなっているか。
- ・ 学校や児童生徒の変容をどのように捉えるか。

ここでは、昨年度の研究協力員の授業の成果を記載する（表1-4）。略案等の授業の詳細については、令和3年度調査研究発表会資料及び研究紀要126号に記載している。

表 1-4 令和3年度の研究協力員の実践事例 ※ 表中の〔分類(記号)〕は図1-10による

(小学校) 第6学年 道徳の実践例 【大型提示装置による導入と、シンキングツールでの思考とその集約】	
	〔分類〕 ◆ ロイロノート・スクール（以下、ロイロノートと表記）を活用した 考えの集約及び共有 CI・C2 → 一人一人が友達の意見をじっくり読み、自分の考えとの共通点や 相違点について考えることができた。 ◆ シンキングツールを活用した思考 BI・AI → 具体的な場面に照らしながら直接意見を交流させることができた。 B3 → ツールの特徴を利用して、多面的かつ段階的に考えることができた。 ◆ 大型提示装置によるスライド・動画の提示 AI → スライドを確認することで、より主題に迫ることができた。 AI → 動画を視聴し、興味・関心が高まり、問題意識をもつことができた。
(小学校) 第6学年 算数（習熟度別クラス）の実践例 【授業支援システムによる思考の可視化と、テキストマイニングを活用したまとめ】	
	〔分類〕 ◆ ロイロノートを活用した課題の提示 AI・BI → 課題解決に必要な素材の提示することで児童が課題の解決に集中できた。 ◆ ロイロノートを活用した考えの集約及び共有 CI → 友達の発表を、興味をもちながら聞き、より深く思考することができた。 ◆ シンキングツールを活用した思考 B3 → 自分が思考しやすいツールを選択し、考えをより深めることができた。 ◆ Google スプレッドシート・テキストマイニングを活用したまとめ BI・AI → 友達の意見も参考にしながら自分の言葉でまとめ、授業のポイントを視覚的に振り返ることで自己評価がしやすくなった。
(中学校) 第2学年 技術・家庭科（技術分野）の実践例 【授業支援システムによる問題の共有と思考の可視化】	
	〔分類〕 ◆ 電子黒板を活用して、前年度に製作した本立てを提示した導入 AI → 以前学習した内容を確認しやすくなった。 ◆ ロイロノートを活用した情報共有 C2 → 気付いた問題を瞬時に各班で共有でき、活動時間が確保できた。 B3 → 解決したい問題をそれぞれ付箋カードに記入することで、活動時間が確保できた。 ◆ シンキングツールを活用した思考 C2 → シンキングツールを活用して問題の分類し、より実用性のあるプログラム案を決めることができた。
(高等学校) 電子科第1学年 情報技術基礎の実践例 【Google フォームによる復習テストの実施とタブレット端末での撮影・提出】	
	〔分類〕 ◆ Googleフォームを活用した復習テストの実施 AI・BI → 前時の学習内容を振り返り、興味・関心を高めて本時の学習に取り組むことができた。 ◆ 書画カメラ・画面転送装置を活用した教材の提示・説明 AI → 流れ図とコード文を横並びに生徒の端末に提示することで、処理内容をイメージしやすくなった。 ◆ 学習用C言語開発環境を活用した選択処理のコーディング B4・CI → コーディング・デバッグに、個別・協働で取り組めた。 ◆ ロイロノートを活用した情報共有 BI → ワークシート、作成したプログラムと実行結果を共有し、生徒の学習状況を把握し、個別に支援することができた。 ◆ 大型提示装置を活用した生徒の発表 CI → 日常的にICTを活用して発表する機会を設けることで、円滑に発表することができた。

4 令和3年度の情報教育研修課調査研究の成果と課題

これまで述べてきたように、当センター情報教育研修課では、令和2年度から2年間にわたり、「1人1台端末時代における授業デザイン『GIGAスクール構想』の実現による学びのイノベーション」を研究主題として調査研究を進めてきた。ここでは、その成果と課題の中から、令和4年度の調査研究につながるものを示す。

(1) 研究の成果

- ・ 小学校から中学校までの系統的な情報活用能力の育成を意図して、当センター版「情報活用能力体系表」を作成し、示すことができた。
- ・ GIGAスクール構想の「はじめの一步」としての端末活用モデル「しら・とる・つく・とる」を作成し、児童生徒による1人1台端末の活用場面を示すことができた。
- ・ 各種講座で、当センター版「情報活用能力体系表」、端末活用モデル「しら・とる・つく・とる」の周知や検証授業の紹介を行ったり、研究の成果物を当センターWebサイト「鹿児島県GIGAスクール構想の実現に向けて」で発信したりすることができた。各種講座への参加者の感想からも、ICTを日常的に取り入れている学校が増えていることが分かる。

(2) 今後の課題

- ・ 当センター版「情報活用能力体系表」及び端末活用モデル「しら・とる・つく・とる」の周知等により、教職員の意識改革、授業改善を促す必要がある。また、学習指導におけるICTの効果的な活用推進に向けて、各教科等及び各校種における取組事例を収集し、検証を重ね、効率的に情報発信を行う必要がある。
- ・ 「はじめの一步」である端末活用モデル「しら・とる・つく・とる」に掲載している活用方法が日常的に実践されている学校について、次の一步となる教科等におけるICTの効果的な活用に向けての支援や授業以外での効果的な活用に向けての支援についても進めていく必要がある。
- ・ ICTの効果的な活用については、個や学校による差が大きくなっていると感じている。今後は、個人や学校の課題に応じた支援を考えていきたい。

なお、当センターWebサイト「鹿児島県GIGAスクール構想の実現に向けて」には、関連情報や研修会情報、実践事例、操作動画・資料等を掲載している（図1-12）。各学校における授業や校務での更なる活用、児童生徒の情報活用能力の育成推進のための参考にしていきたい。



図1-12 当センターWebサイト「鹿児島県GIGAスクール構想の実現に向けて」

IV 意識調査から

当センターでは、令和4年度の研究を始めるに当たって、「令和の日本型学校教育」を鹿児島県で実現するために、学校現場では、どのようなことを課題としたり、研修内容として必要としたりしているかを把握することとした。そこで、令和3年度の研修会の受講者の協力により、意識調査を行った。その際、希望研修への参加者ではなく、主として悉皆研修への参加者の意見を集約することで、学校規模や校種等に偏りがないようにした（表1-5）。

表1-5 意識調査対象者

（単位：人）

対象者	合計	行政	小学校	中学校	義務教育 学校	高等学校	特別支援 学校
採用2年目の教職員等	468	4	279	90	3	56	36
10年経験者の教職員等	301		139	64	1	73	24
免許状更新講習の教職員等	98		42	21	0	28	7
任用2年目の校長	130		86	30	2	8	4
任用2年目の教頭	108		66	22	6	10	4
合計	1105	4	612	227	12	175	75

また、鹿児島県の教育的課題に対応するため、当センターの所員（研修部46人）にも意識調査を行い、年間約180回の短期研修や約400回の講師派遣等の中で把握している状況等も併せて考えることとした。

選択項目については、これまでの当センターでの研修の受講者からの要望や「令和の日本型学校教育」の構築のために当センターで対応し得るもの等を中心に示した。以下が意識調査の内容とその結果（一部）である。

○ 意識調査の内容（受講者、所員共通）

質問1：学校現場における喫緊の課題は何だと考えますか。（複数回答可）	
選択項目 （32項目）	学力向上、評価（「指導と評価の計画」含む。）、総合的な学習（探究）の時間、特別支援教育、個に応じた指導の在り方、キャリア教育、幼児教育、郷土教育、情報教育（情報活用能力の育成）、プログラミング教育、オンライン授業の実施、道徳教育、特別活動の指導、カリキュラム・マネジメント、部活動指導、外国人児童生徒への日本語指導、生徒指導、不登校児童生徒への対応、いじめ問題、人権教育、複式学習指導、食育・食農教育、校内（教職員間）の連携、保護者との連携、地域との連携、外部機関との連携、学級経営、学校運営（学校組織マネジメント）、業務改善、校内研修の充実、感染症対策、その他（記述）
質問2：学校現場での「令和の日本型学校教育」の構築実現に向けて、必要だと思われる研修（講座）の内容には、どのようなものが考えられますか。（複数回答可）	
選択項目 （44項目）	学力向上（授業改善）、新学習指導要領の概要、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」、評価（「指導と評価の計画」含む。）、共通教科「情報」（高校）、総合的な学習（探究）の時間、支援が必要な子供への指導、個に応じた指導方法・教材等、学習者主体の授業デザイン、特別支援教育、校種間接続、キャリア教育、産業教育、幼児教育、郷土教育、情報教育（情報活用能力の育成）、プログラミング教育、情報モラル・セキュリティ、教科指導におけるICT活用、オンライン活用、環境教育、ボランティア活動、道徳教育、生徒指導、カウンセリング、不登校児童生徒への対応、いじめ問題への対応、命の教育（ゲートキーパー養成）、人権教育、食育・食農教育、健康教育、特別活動、アングラー・マネジメント、カリキュラム・マネジメント、学校運営（学校組織マネジメント）、校内の連携協働力、働き方改革、学級経営、校内研修の充実、授業検討会の在り方、複式学習指導、その他（記述）

○ 意識調査結果

以下に、回答数が多かった項目をまとめる（表 1-6）。

※ 上から、回答数が多かった順

※ 選択項目数と結果：質問 1 は 10／32 項目，質問 2 は 14／44 項目

※ 背景色が黄色の項目は，令和 4 年度の調査研究に係る回答

表 1-6 意識調査結果（一部抜粋）

質問 1：学校現場における喫緊の課題は何だと考えますか。（複数回答可）			
受講者（1,105 人）		所員（46 人）	
1 学力向上	60%	1 学力向上	63%
2 業務改善	33%	2 特別支援教育	50%
3 個に応じた指導の在り方	29%	2 業務改善	50%
4 特別支援教育	24%	4 不登校児童生徒への対応	48%
4 不登校児童生徒への対応	24%	5 いじめ問題への対応	46%
6 情報教育（情報活用能力の育成）	22%	5 情報教育（情報活用能力の育成）	46%
7 評価（「指導と評価の計画」含む。）	20%	7 評価（「指導と評価の計画」含む。）	41%
8 プログラミング教育	16%	8 オンライン授業の実施	39%
9 生徒指導	14%	9 個に応じた指導の在り方	37%
10 オンライン授業の実施	12%	10 生徒指導	26%
質問 2：学校現場での「令和の日本型学校教育」の構築実現に向けて，必要だと思われる研修（講座）の内容には，どのようなものが考えられますか。（複数回答可）			
受講者（1,105 人）		所員（46 人）	
1 学力向上（授業改善）	51%	1 学力向上（授業改善）	59%
2 教科指導における ICT 活用	37%	2 支援が必要な子供への指導	48%
3 思考力，判断力，表現力等	36%	2 学習者主体の授業デザイン	48%
4 学びに向かう力，人間性等	33%	2 教科指導における ICT 活用	48%
5 支援が必要な子供への指導	31%	5 評価（「指導と評価」の計画含む。）	46%
6 個に応じた指導方法・教材等	29%	6 学びに向かう力，人間性等	43%
6 働き方改革	29%	6 個に応じた指導方法・教材等	43%
8 情報教育（情報活用能力の育成）	20%	6 働き方改革	43%
9 プログラミング教育	19%	9 思考力，判断力，表現力等	41%
9 オンライン活用	19%	10 特別支援教育	37%
9 不登校児童生徒への対応	19%	11 校内の連携協働力	33%
12 評価（「指導と評価」の計画含む。）	18%	12 オンライン活用	30%
12 特別支援教育	18%	12 不登校児童生徒への対応	30%
12 情報モラル・セキュリティ	18%	12 カリキュラム・マネジメント	30%

これらの結果から，令和 4 年度に当センターが「学校現場が喫緊の課題であると感じていること」にどのように対応するか，「令和の日本型学校教育」の構築実現に向けてどのような研修を実施するかを検討した。また，令和 4 年度の調査研究（プロジェクト研究）として取り組むべき内容と通常の講座・研修等で対応すべき内容を検討した。その結果，令和 4 年度の調査研究（プロジェクト研究）では，「令和の日本型学校教育」の実現に向けて，「1 人 1 台端末の活用」を軸とした個に応じた指導や学びの充実について研究することとし，「教科等における ICT の効果的な活用」，「オンライン活用による学びの充実」，「支援が必要な児童生徒の ICT の効果的な活用」，「児童生徒理解における ICT の活用」の四つについて取り組むこととした。

V 今年度の調査研究

Ⅱ～Ⅳを受け、令和４年度は、「Ｉ人Ｉ台端末時代における新たな学校教育の在り方」を研究主題としてプロジェクト研究を行った。Ⅰでも述べたように、当センターの研修課は、例年各課で調査研究を進めているが、今年度は、六つの課を解いて、それぞれの課や所員の専門性を生かしながら、Ⅳの結果を基に四つの班を編制し、実践研究を行った（各班の研究主題は、表 1-7）。

また、前述したように、今年度の調査研究の最大の特徴は、先行研究ではなく、地域や学校の課題及び目標などに寄り添い、学校と共に実践を重ねながら個人や学校がステップアップすることを目的とした「実践研究」であるということである。そのため、学校規模や ICT の活用状況を問わず、様々な課題及び目標をもった学校と実践研究を行うこととした。研究協力校として委嘱したのは、表 1-7 の 24 校である。研究協力校を訪問する際には、学校のニーズに合わせて、それぞれの研究主事が教科等や係などの専門性を生かして助言や支援をすることができるよう、複数人で訪問するようにした。

表 1-7 各班の研究主題と研究協力校

班	研究主題	研究協力校	
A	子供の学びに着目し、ICT を効果的に活用した授業デザイン	鹿児島市立山下小学校 始良市立帖佐小学校 曾於市立末吉小学校 霧島市立陵南中学校 出水市立鶴荘学園	いちき串木野市立生福小学校 垂水市立水之上小学校 鹿児島市立吉田南中学校 鹿屋市立吾平中学校 県立松陽高等学校
B	高等学校における遠隔授業の実践と研究 －ICT の効果的な活用を通して学びの充実を目指して－	【コアスクール】 県立串木野高等学校 【サテライトスクール】 県立枕崎高等学校 県立南大隅高等学校	県立大口高等学校 県立古仁屋高等学校
C	障害のある児童生徒の学びの充実を図る研究 －特別支援学校におけるICTの効果的な活用を通して－	県立南薩養護学校	県立出水養護学校
D	児童生徒理解に関する研究 －ICT の効果的な活用を手掛かりとして－	伊佐市立本城小学校 伊佐市立菱刈小学校 伊佐市立湯之尾小学校 県立伊佐農林高等学校	伊佐市立南永小学校 伊佐市立田中小学校 伊佐市立菱刈中学校

この後、当センターが学校の伴走者となるべく、研究協力校と一緒に課題や目標を設定し、相談しながら、現状から一歩前進していくことを目的として進めてきた、実践研究の軌跡を班ごとに述べる。

◇ 引用・参考文献等

【引用文献等】

- 1) 文部科学省「GIGA スクール構想の実現」に関する補助事業の概要について (R2.1.16-17)
https://www.mext.go.jp/content/20200219-mxt_syoto01-000003278_505.pdf
(2022 年 5 月 18 日閲覧)
- 2) 文部科学省 (リーフレット)「GIGA スクール構想の実現へ」
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf
(2022 年 5 月 18 日閲覧)
- 3) 中央教育審議会 (R3.1.26)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」
概要 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf
(2022 年 3 月 24 日閲覧)
本文 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
(2022 年 3 月 24 日閲覧)
総論解説 https://www.mext.go.jp/content/20210329-mxt_syoto02-000012321_1.pdf
(2022 年 4 月 22 日閲覧)
- 4) 中央教育審議会 (R3.1.26)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
(2022 年 3 月 24 日閲覧)
- 5) 中央教育審議会 (R3.1.26)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
(2022 年 3 月 24 日閲覧)
- 6) 中央教育審議会 (R3.1.26)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
(2022 年 3 月 24 日閲覧)
- 7) 文部科学省 (2017)「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説総則」
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf (2021 年 7 月 23 日閲覧)
- 8) 中央教育審議会 答申 (平成 28 年 12 月) 別紙 3 - 1
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_2.pdf (2021 年 7 月 23 日閲覧)
- 9) 文部科学省 (令和 2 年 6 月)「教育の情報化に関する手引-追補版-」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html
(2020 年 9 月 3 日閲覧)
- 10) 文部科学省 (令和元年)「情報活用能力の体系表例 (IE-School における指導計画を基にステップ別に整理したもの) (令和元年度版)」
https://www.mext.go.jp/content/20201014-mxt_jogai01-100003163_005.pdf
(2020 年 9 月 3 日閲覧)
- 11) 文部科学省 (リーフレット)「GIGA スクール構想の実現へ」
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf
(2020 年 9 月 3 日閲覧)
- 12) 第 3 期教育振興基本計画 (平成 30 年 6 月 15 日閣議決定)
https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf (2021 年 7 月 23 日閲覧)
- 13) 文部科学省 (平成 28 年 7 月 28 日)「2020 年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」最終まとめ
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/07/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375100_01_1_1.pdf
(2021 年 7 月 23 日閲覧)
- 14) 文部科学省 (平成 22 年 10 月)「教育の情報化に関する手引」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm (2020 年 9 月 3 日閲覧)
- 15) 文部科学省 (平成 29 年)「ICT を活用した指導方法 (学びのイノベーション事業実証研究報告より)」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/14/1408183_4.pdf (2020 年 9 月 3 日閲覧)

令和4年度 調査研究（プロジェクト研究）

【D班】

「児童生徒理解に関する研究」
－ ICT の効果的な活用を手掛かりとして－



令和5年 3月
鹿児島県総合教育センター

I 研究の目的

教育相談課では、令和元年度からの3か年で『『学校楽しいーと』を活用した不登校の未然防止に関する研究』に取り組んだ。研究Ⅰ（令和元・2年度）では、全ての児童生徒を対象とした集団支援に焦点を絞った取組を通して、研究Ⅱ（令和3年度）では、研究Ⅰの取組を生かしながら、多面的な児童生徒理解と多層的な支援を実現する教職員集団の在り方の研究を通して、新たな不登校児童生徒を生まないための取組を研究した。その成果は次のとおりである。

- 児童生徒理解の一助として「学校楽しいーと」等の質問紙を丁寧にアセスメントし、個や学級の支援に活用することが不登校の未然防止につながることを示した。
- ケース会議の手法にインシデント・プロセス法を用いて、教職員が相互に質問や意見を出し合い協働することにより、目標・支援策を構築するなど、不登校の未然防止のための組織的な支援体制の在り方を提案した。

しかしながら、児童生徒を取り巻く状況には不登校をはじめ、いじめ、自殺、児童虐待等の多くの課題がある。学校においては組織的対応を基本としながら、未然防止や早期発見・早期対応に取り組んでいるが、その状況や要因、背景は多様化・複雑化しており、重大化も懸念される。加えて、コロナ禍において児童生徒の生活や環境が大きく変化したことにより、不安や悩みを相談できない児童生徒がいる可能性や、児童生徒の不安や悩みが従来とは異なる形で現れたり、一人で抱え込んだりする可能性があることを考慮する必要がある。そして、周囲の大人が児童生徒のSOSを受け止め、組織的対応を行い、必要に応じて関係機関等につなげて対処していくことがますます重要になっている。

そこで、的確な児童生徒理解をより深め、組織的な支援を展開すること、校内支援体制を更に充実させることを目指し、そのツールとしてICTを効果的に活用できるのではないかと考えた。

『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して¹⁾』の答申においても、個別最適な学びの実現のため、「これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援すること」、「その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を蓄積・分析・利活用することや、教師の負担を軽減することが重要である」と述べられている。このことから生徒指導におけるICTの効果的な活用やより効率的で的確な児童生徒理解のためのシステムの構築、得られたデータ等の組織的な活用の在り方を提案したい。

II 研究の内容

生徒指導の基本となるのは教職員の児童生徒理解である。本研究では、児童生徒理解のためのICTの効果的な活用として、次の2点に取り組むことにした。

- ICTを活用することで、「学校楽しいーと」の実施、個票作成において効率化を図る。ま

1) 中央教育審議会（令和3年1月26日）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』【本文】

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2022年11月1日閲覧）

た、「学校楽しいーと」の丁寧なアセスメントにより、定期的（中長期的）な児童生徒理解を一層深められるようにする。

- 児童生徒の心身の状態の変化をキャッチし、児童生徒理解の幅の広がりを目指す心の健康観察（「こころ便ポチッと」）を ICT を活用して実施する。また、そのデータのアセスメントにより、日常的（短期的）な児童生徒理解を一層深められるようにする。

上記 2 点の取組におけるデータを教職員間で共有し、組織的に活用することで、多面的な児童生徒理解や多層的な支援に生かす方策を、研究協力校の実践を通じて研究する。

Ⅲ 研究の実際

1 「学校楽しいーと」における ICT の活用

(1) ねらい

「学校楽しいーと」（図 5-1）は、鹿児島大学の協力の下、平成 24 年に当センター教育相談課が開発した学校適応感を把握し、生徒指導上の諸課題の未然防止や早期発見・早期対応に活用する質問紙である。

平成 29 年改定の「鹿児島県いじめ防止基本方針」²⁾ にも、「いじめを認知する際の留意点として、例えば、いじめられていても、本人がそれを否定する 경우가多々あることを踏まえ、当該児童生徒の表情や様子をきめ細かく観察するなどして確認する必要がある。この場合、微かなサインに気付くための『学校楽しいーと』や『SNS チェックシート』の質問紙を活用するなど、児童生徒の心身の状態や交友関係の状況等を多面的に把握してアセスメントを行うことも有効である。」と明記されており、県内の多くの学校で活用されている。

しかし、個票の作成を行うためには、教職員が児童生徒一人当たり 28 問の回答を全員分 Microsoft Excel のシートに入力する必要がある、「学校楽しいーと」を実施したものの、入力作業に時間が掛かり、児童生徒の実態の早急な把握・分析や個票の十分な活用が行われていない状況が見受けられた。

そこで、児童生徒の実態の迅速な把握や丁寧な分析、さらに、深い児童生徒理解とチームによる支援を可能にするため、1人1台端末を始めとする ICT を活用して、個票作成における作業の効率化を図ることとした。



図 5-1 「学校楽しいーと」 Microsoft Forms 版

2) 鹿児島県「鹿児島県いじめ防止基本方針」（平成 29 年 10 月）

https://www.pref.kagoshima.jp/ba04/kyoiku-bunka/school/shidou/documents/62189_20171016203905-1.pdf
（2022 年 11 月 1 日閲覧）

(2) 内容

- ア これまで児童生徒が質問紙で回答していた「学校楽しいーと」を、タブレット端末を使い、Microsoft Formsで各自が回答できるようにする。
- イ これまで教職員が全員分の回答を入力して作成していたMicrosoft Excelのデータを、Microsoft Formsを活用して児童生徒の回答がそのままデータとなるようにすることで、短時間で容易に個票の作成ができるようにする。
- ウ 「学校楽しいーと」の実施から個票の作成までの時間が短縮されるため、生み出された時間を活用して、より多くの児童生徒の実態把握・分析や支援方針の立案等のアセスメント、それに基づいた組織的対応に生かせるような体制を整える。

(3) 研究協力校の実践

- ア Microsoft Formsによるタブレット端末を使っの「学校楽しいーと」の実施
- イ タブレット端末での実施になったことによる活用方法や工夫の検討・実施（データの活用方法やチーム支援におけるデータ活用の工夫、教職員間の情報共有の仕方の変容等）
- ウ 意識調査の実施（児童生徒・教職員）

2 「こころ便ポチッと」におけるICTの活用

(1) ねらい

学校では何らかの方法で、毎朝体調面等の健康観察を行っている。一方、「心の状態はなかなか言いづらい。」「先生に相談したいがタイミングに迷っている。」という児童生徒や、様子を観察しただけでは普段と変わらないが悩みを抱えながら登校している児童生徒がいる可能性がある。更に、それらの中には、大きな不安や悩みを抱えている場合などもある。

そこで、ICTを活用して、体調面等の健康観察と同様、児童生徒にとっては心身の状態、不安や悩みを教職員に伝える機会となり、教職員にとっては児童生徒のSOSを受け止める機会となるのが「こころ便ポチッと」で、いわば毎日の「心の健康観察」である。

「学校楽しいーと」と同様に、Microsoft Formsを活用することで、児童生徒の心身の状態を容易に把握できる。また、そのデータから得た情報を基に、個別の支援や組織的対応を行うことで、様々な生徒指導上の課題の未然防止や早期発見・早期対応につなげることができると考える（図5-2）。

(2) 内容

- ア 児童生徒が自分の心身の状態等を入力する「こころ便ポチッと」（図5-3）をタブレット端末を使い、Microsoft Formsで毎日回答できるようにする。
- イ 教職員は児童生徒の回答を効率的に集約し（図5-4、5-5）、教職員間でデータを共有して組織的な児童生徒理解や児童生徒支援に活用する。



図5-2 「こころ便ポチッと」実施イメージ

ウ 日々の児童生徒個々の状況や学級全体の状況を把握することにより、生徒指導上の諸課題の未然防止や早期発見・早期対応につなげる。

(3) 研究協力校の実践

ア タブレット端末で Microsoft Forms による「こころ便ポチッと」の実施

イ 学校独自の質問項目の検討

(ア) 全校種共通の質問は、「今日の気分を教えてください。」の一问。各学校は、児童生徒の実態に応じ、学校独自の質問項目として増やすことができる。また、学校独自の質問項目は随時変更することが可能なため、例えば学校行事に関する質問を一定の期間だけ設定する等のアレンジをすることもできる。

(イ) 全校種共通の一问の回答の選択肢についても、学年等の状況に応じて文言を変更する等のアレンジをすることができる。

ウ 「こころ便ポチッと」のデータの活用場面や活用方法の工夫、教職員間の情報共有の仕方の検討・実施、チーム支援

エ 意識調査の実施（児童生徒・教職員）

なお、各研究協力校の「学校楽しいーと」及び「こころ便ポチッと」における ICT 活用の実践例は別紙にまとめているので、参照されたい。

図 5-3 「こころ便ポチッと（Microsoft Forms 版）」

	A	B	C
1	今日（きょう）の日付	出席番号	今日（きょう）の気分（きぶん）
2	11/1/2022	1	とてもよい
3	11/1/2022	4	ふつう
4	11/1/2022	5	とてもよい
5	11/1/2022	3	よくない
6	11/1/2022	2	とてもよい
7	11/1/2022	8	ふつう
8	11/1/2022	6	非常（ひじょう）によくない
9	11/1/2022	7	よい
10			

図 5-4 「こころ便ポチッと」回答の Microsoft Excel データイメージ

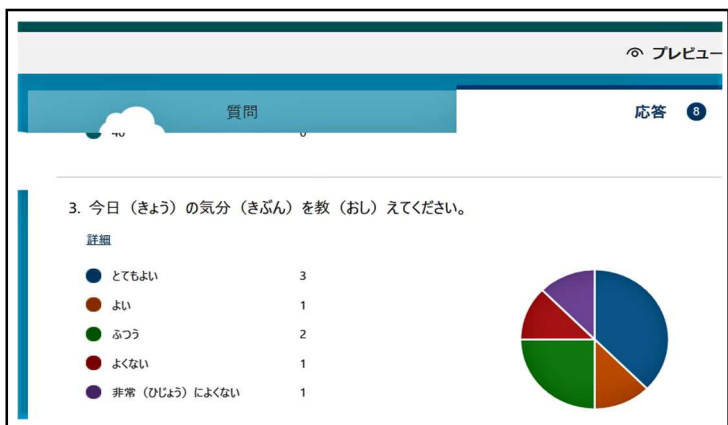


図 5-5 「こころ便ポチッと」回答データ Microsoft Forms での確認画面イメージ

IV 研究のまとめ

本研究に当たり、研究協力校に対して実施した意識調査を基に研究のまとめを述べる。

- 1 回目 実施時期：7 月 回答者：教職員 33 人，児童生徒 168 人
 2 回目 実施時期：11 月 回答者：教職員 40 人，児童生徒 170 人
 ※ 質問は、四択による選択型。2 回目のみ、自由記述式の質問を追加

1 「学校楽しいーと」における ICT の活用の成果と課題

「学校楽しいーと」における ICT 活用に関する教職員の感想を集計した結果（表 5-1）によれば、「学校楽しいーと」の実施に ICT を活用することで紙媒体での実施と比較し、個票の作成が容易になったと感じている教職員が多いことが分かる。

表 5-1 「学校楽しいーと」における ICT 活用に関する教職員の感想（自由記述：26 人，複数回答あり）

入力作業が省略され，個票の作成が容易になった。	18 人
タブレット端末を使い，児童生徒が意欲的に回答できた。	3 人
小学校低学年への実施に工夫が必要である。	3 人
児童生徒理解や教育相談に活用できた。	2 人
教職員の ICT 活用のスキルを高める必要がある。	2 人
「学校楽しいーと」の実施が容易になった。	1 人
紙媒体の実施でもよい。	1 人

(1) 成果

これまでに比べ、個票を作成するために教職員が児童生徒の回答を入力する時間が不要になるとともに、実施も容易になり、個票をデータで取り扱うことができるようになった。これにより、個々の児童生徒への支援を全職員で検討・共有したり、全職員がデータを見ることができるよう共有方法を工夫したりする等、生み出された時間を使ってデータの分析や支援の検討、チーム支援に活用することができた。

(2) 課題

小学校低学年の実施に関しては、回答の入力に時間を要することから設問の数や内容を精選する方がよいという感想もあった。Microsoft Forms の質問項目の表示の仕方を工夫したり、設問を見直したりするなど、児童生徒理解のためのツールとしての機能を高めるためにも次年度以降の研究の課題として捉えたい。

2 「こころ便ポチッと」における ICT の活用の成果と課題

「自分の嬉しかったことや楽しかったことなど」に関する相談のしやすさに関する意識を集計した結果（図 5-6）によれば、「自分の嬉しかったことや楽しかったことなど」について「よく伝えている」、「まあまあ伝えている」と回答した教職員の割合より「伝えていることができている」、「まあまあ伝えることができている」と回答した児童生徒の割合が上回っていることから、教職員の認識より児童生徒は伝えていると実感していることがうかがえる。

また、「自分の悩みや困っていることなど」に関する相談のしやすさに関する意識を集計した結果（図 5-7）によれば、「自分の悩みや困っていることなど」について「よく伝えている」、「まあまあ伝えている」と回答した教職員の割合と「伝えることができている」、「まあまあ伝える

ことができている」と回答した児童生徒の割合がほぼ等しいことから、「自分の悩みや困っていることなど」の相談のしやすさについては、教職員と児童生徒の意識はほぼ一致していることが分かる。さらに、図 5-6 の結果と比較すると、児童生徒はネガティブな内容、困りごとに発信しづらさを感じていることがうかがえる。

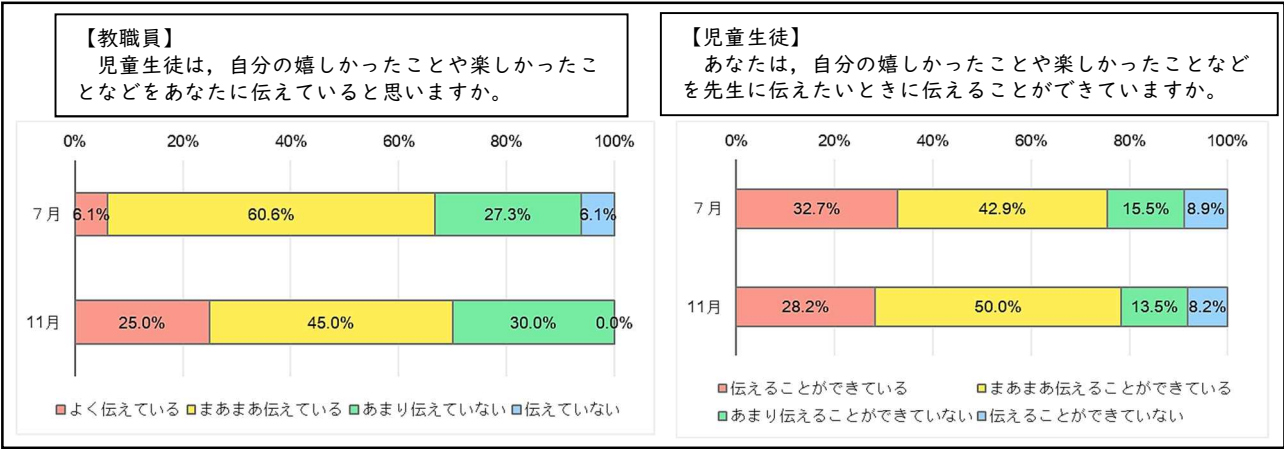


図 5-6 相談のしやすさに関する意識①

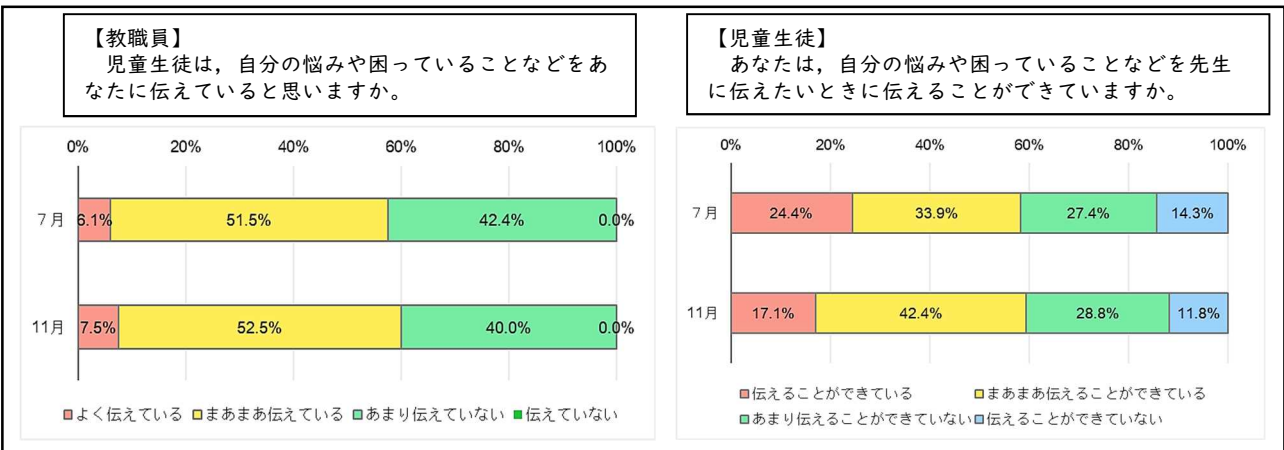


図 5-7 相談のしやすさに関する意識②

「こころ便ポチッと」をしてみて、よかったと感じることがあれば書いてください。

- ・ 先生に自分の気持ちを言えなくても、分かってもらえるのがよい。
- ・ 気持ち（心）がすっきりした（落ち着いた）。
- ・ 嫌なことはすぐ先生に言うようにしたい。
- ・ 自分のことを知ることができる。
- ・ 自分の気持ちが言える（伝えることができる）。
- ・ 人に自分の気持ちを伝えられるようになった。
- ・ 気分の変化が分かるようになった。
- ・ 自分のことをよく知ろうと思えるようになった。
- ・ みんなの前で言にくいときにいいと感じる。

資料 5-1 児童生徒における「こころ便ポチッと」に取り組んだ感想（自由記述）

(1) 成果

「こころ便ポチッと」に取り組んだ児童生徒の感想（資料 5-1）によれば、「こころ便ポチッと」に取り組んだことで、「先生に自分の気持ちを言えなくても、分かってもらえるのがよい。」「気持ち（心）がすっきりした（落ち着いた）。」「嫌なことはすぐ先生に言うようにしたい。」「自分のことを知ることができる。」等、教職員に分かってもらえるという安心感から援助希求的態度を身に付けたり、自己理解を深めたりするきっかけになったことが分かった。今後、教職員と児童生徒が共にデータを活用する取組としても発展させたいと考える。

(2) 課題

7月と11月を比較すると児童生徒の悩みや困っていること等の相談のしやすさに大きな変化はなかったが、「こころ便ポチッと」の回答を基に、一人一人に寄り添った声掛けや個別対応を行った学校の中には、児童生徒の相談のしやすさが大きく増加した学校もあった。

このことから「こころ便ポチッと」をより効果的に活用する際には、教職員が児童生徒の回答を基に、気になる回答をしている児童生徒に声を掛けたり、必要に応じて教育相談を行い、思いを聞き取ったりするなどの個別の対応を通して、児童生徒が実感しやすい具体的なアクションを起こすことが必要であると考え。学校における効果的な活用事例や実践等を積極的に情報提供していきたい。

3 今後に向けて

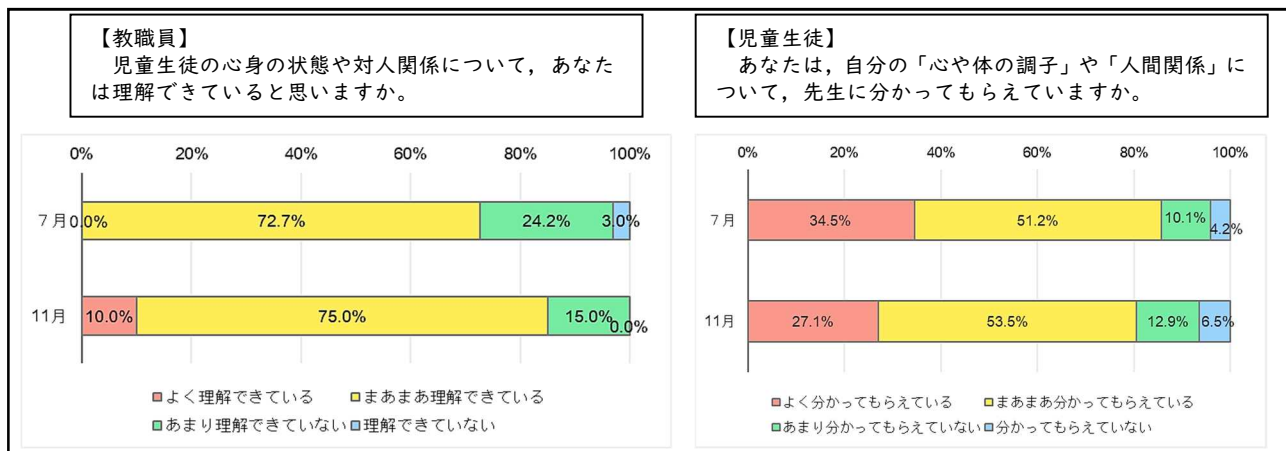


図 5-8 心身の状態や対人関係の理解に関する意識

心身の状態や対人関係の理解に関する意識を集計した結果（図 5-8）によれば、児童生徒理解に ICT を活用する前後である 7月と 11月を比較したとき、教職員においては ICT 活用によって児童生徒の心身の状態や対人関係について理解できていると回答した割合が増えた一方、児童生徒は ICT 活用によって伝える機会は増えたにも関わらず、分かってもらえていると回答した割合がやや低くなり、教職員と児童生徒の意識に差があることが分かる。

児童生徒は、ICT、対面のいずれの方法でも先生に自分の気持ちなどを伝えたら、声を掛けてもらえるという期待を高めるものである。ICT の場合、児童生徒は対面で伝えることができないことを伝えることができ、教職員は観察だけでは把握しづらい状況を理解できる。そのため、より具体的に児童生徒理解を深められるよさがある一方で、非対面のコミュニケーションであるがゆえにレスポンスのタイミングは児童生徒の回答直後とは限らず、児童生徒が対面の場合と比較し

て即応的な支援と実感しづらい場合があると考ええる。児童生徒，教職員の意識のギャップは，このような具体的な支援や即応的な支援の視点にあるのではないかと考えられる。教職員が迅速に対応できるよう，回答データを活用しやすく工夫した学校では，全職員での情報共有，支援につなげるアプローチが展開されていることから，児童生徒の悩みや困りごとを的確に把握し，児童生徒が「先生に伝わった。」，「先生に分かってもらえた。」と実感できる具体的で即応的な支援をしていくことが大切である。

生徒指導や教育相談においては，ICT は児童生徒理解を深めるツールの一つであり，これまでのカウンセリングマインドを大切にした教職員の支援をより充実させ得るものである。教職員がこれまでに積み重ねてきた実践を土台とし，ICT の特性を見極めながら活用していくことでその効果が得られるものと考ええる。児童生徒理解の幅の広がりにつなげ，悩みや不安を抱える児童生徒の早期発見や早期対応の一助としたい。

V 活用事例紹介

研究協力校における ICT を活用した「学校楽しいーと」と「こころ便ポチッと」の事例を次頁から紹介する。

「『学校楽しいーと』Microsoft Forms 版」～活用事例紹介～

伊佐市立田中小学校（児童数 79 人，学級数 8 学級，職員数 19 人）

いつ？（When?） 生徒指導事例会（7 月，12 月の第 3 月曜日），学校運営協議会

だれが？（Who?） 全職員，学校運営協議会委員・管理職

どのように？（How?）

- ・ 学期毎に「『学校楽しいーと』Microsoft Forms 版」を Microsoft Teams にて児童に送信し，回答を集約した。
- ・ 集約結果は生徒指導主任が個票にして，各学級担任へデータで配布した。
- ・ 六つの項目の大小ではなく，バランスを分析したとき，自己肯定感の落ち込みが見られたので，本校の課題であることが明らかになった。
- ・ 1 学期の「学校楽しいーと」の分析から課題として明らかになった自己肯定感を高めるために，2 学期始業式の際に，生徒指導主任から「『自分のいいね！』や『友達のいいね！』を見付けられるようになろう。」という話をした。その際，アフリカの言葉（ジンバブエの現地語，ショナ語）の「タナカ」には，「いいね（We are good.）」という意味があることを紹介し，意識付けを図った。また，「こころ便ポチッと」に自己肯定感に関する質問項目を設定し，毎日の振り返りに活用した。

ICT 活用による手応え

- 【児童】 ・ 自己肯定感に関する「こころ便ポチッと」の質問項目に回答することで，前日に自分や友達の「いいね！」を見付けることができたかを手軽に振り返ることができ，今日一日，自分や友達のよさを見付けようという意識付けにつながった。
- 【教職員】 ・ これまでの紙媒体での実施よりも業務が簡素化され，集計に費やす時間が大幅に減った。

伊佐市立菱刈小学校（児童数 81 人，学級数 8 学級，職員数 19 人）

いつ？（When?） 生徒指導研修（長期休業中の校内研修：60 分）

だれが？（Who?） 各担任，養護教諭，専科教員等

どのように？（How?）

- ・ 「学校楽しいーと」の結果を基に，今後の個々の児童への指導・支援の在り方について，全職員で検討を行った。
- ・ 個々の児童のアセスメントシートを作成することで，児童への関わりについて，具体的に誰がどのように関わっていくのかを明確にすることができた。
- ・ 分析結果のデータを保護者との教育相談の際に示すことで，客観的なデータを基に，児童の課題や今後の方向性について話し合うことができた。
- ・ 学期毎に「学校楽しいーと」を実施し，集計することで，児童の学期毎の変容を把握し，指導・支援に反映させることができた。

ICT 活用による手応え

- 【教職員】 ・ 「学校楽しいーと」のデータを基に，生徒指導研修を実施することで，具体的に学級の児童に対する手立てを話し合うことができ，指導・支援に役立たせることができた。

伊佐市立湯之尾小学校（児童数 55 人，学級数 6 学級，職員数 9 人）

いつ？（When？） 教育相談（児童・保護者）

だれが？（Who？） 各学級担任を中心に

どのように？（How？）

- ・ 「学校楽しいと」の個票を基に，個別に教育相談を行った。
- ・ 多方面からの質問があるので，児童の思いを把握することができた。ただし，下学年は，質問の意図が分からず回答できないことがあったため，担任が読み上げたり，補足したりしながら実施した。
- ・ 不登校傾向のある児童について詳しく分析し，保護者を交えて短期的対応と長期的対応について話し合いの場をもつことができた。保護者・教職員の共通理解の下，対応を行っている。

ICT 活用による手応え

- 【教職員】
- ・ 「心の教育推進委員会」で，気になる児童について全職員で，「学校楽しいと」の結果を基に共通理解を図った。その際，「学校楽しいと」の個票を印刷して配布するのではなく，データをスライドに映し出すことで，職員の準備を簡素化して実施することができた。



「学校楽しいと」の個票データを示しながら，情報共有している様子

県立伊佐農林高等学校（生徒数 140 人，学級数 6 学級，職員数 22 人）

いつ？（When？） 「こころ便ポチッと」の質問項目検討の場で

だれが？（Who？） 担任，養護教諭，教育相談係

どのように？（How？）

- ・ 「こころ便ポチッと」の学校独自の質問項目を検討する際に活用した。学級票や個票を見ながら，生徒の回答や情報交換で得られた情報を分析することで，実態把握に必要な質問項目を検討した。「こころ便ポチッと」での実態把握，生徒支援が充実した。
- ・ 学級票や個票の分析から，「心身の状態」がウィークポイントとなっていることが分かった。生徒の状況から原因となり得ることを話し合いながら，質問項目を検討していくことができた。

ICT 活用による手応え

- 【教職員】
- ・ 生徒の回答の入力作業が省略されたのはよかった。
 - ・ 生徒の「心身の状態」を把握することができた。
 - ・ 集計などが簡易である。生徒も質問紙に記入するよりは，タブレット端末で入力する方が慣れていて，時間を掛けず，意欲的に取り組んでいると感じる。



タブレット端末で回答している生徒の様子

伊佐市立菱刈中学校（生徒数 130 人，学級数 6 学級，職員数 16 人）

いつ？（When?） 教育相談（各学期 1 回）

だれが？（Who?） 全職員（管理職，学級担任，学年担任，養護教諭）

どのように？（How?）

- ・ 教育相談において，これまでは紙面での「学校楽しいーと」を活用して学級全体や個人の状況把握をしていたが，「『学校楽しいーと』Microsoft Forms 版」を活用（1 学期はアクセス用の二次元コードを生徒に配布して実施，2 学期は Microsoft Teams に学級毎のチームを作成し，リンク先を共有して実施）し，よりスムーズに回答・集計を行い，全体の傾向や個人の状況が把握できるようにした。
- ・ 「『学校楽しいーと』Microsoft Forms 版」の回答では，学年や組・番号等の入力において，生徒のヒューマンエラーが多く見られたため，ID と記録時間から判別できるように工夫をして活用した。
- ・ データは校内の「教諭フォルダ」に保存しており，全職員がいつでも校務用端末でアクセスすることができるようにして，情報の共有やチーム支援への活用を図った。

ICT 活用による手応え

- 【教職員】
- ・ 「学校楽しいーと」だけでなく，「SNS チェックシート」等でも Microsoft Forms を活用することで，データの処理や管理がスムーズになった。
 - ・ 2 種類のアンケートフォームや各種アンケートがあることで，データが混在する場面もあった。データの管理方法の工夫が必要である。

次への One Step !



- ・ ICT 活用により生み出された時間を，個々の状況の分析や支援方針の策定等に活用できる。指導・支援を教職員の価値観や信念から考えるのではなく，児童生徒理解に基づいて考えるための資料として活用してほしい。
- ・ 「学校楽しいーと」の実施はもとより，教職員の分析や情報共有についても年間計画等に位置付けるなど，PDCA サイクルに基づいた計画的な活用を行うことで，生徒指導体制が充実し，一貫性のある生徒指導につなげることができる考える。

Microsoft Forms 版「学校楽しいーと」のダウンロードは，こちらから！

「鹿児島県総合教育センター」Web サイト

<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/>



「SNS チェックシート」，「ソーシャルスキルシート」の Microsoft Forms 版もあります。



「こころ便ポチッと」 ～活用事例紹介～

県立伊佐農林高等学校（生徒数 140 人，学級数 6 学級，職員数 22 人）

いつ？（When?）

いつでも（例：授業の前後で確認し，生徒の様子等と照らして状況把握，事後対応の参考にしている。）

だれが？（Who?）

全職員

どのように？（How?）

- ・ タブレット端末は全校で 80 台配備されており，職員室の保管庫で管理している。そのため，2 年生に対して週 1 回実施した。
- ・ 生徒の回答データは校内のサーバーに保存し，教職員誰もが容易に閲覧できるようにしている。
- ・ 学校独自の質問として，4 項目を追加して実施した。

- ① 今朝の目覚めはどうでしたか。→「すっきり」，「ふつう」，「寝不足」，「起きられなかった」
- ② 今日の朝食はどうでしたか。→「食事を取って登校」，「飲み物だけとって登校」，「登校後に食事を取った。または食べていない」
- ③ 今日は何が楽しみで登校しましたか。→「授業」，「行事や部活」，「義務感」，「親がうるさいから」
- ④ 今日のやる気度（元気度）を星の数で表現しよう。→星の数 0～5

- ・ 学校独自の質問は，担任や養護教諭，教育相談係で検討した。実態把握に必要な質問を精査する中で，それぞれが今，把握している情報を提供し合うなど，生徒理解を深めることにもつながった。
- ・ 1 台のタブレット端末から複数人の回答ができるため，教室座席の各列先頭の生徒のタブレット端末（5 台）を担任が準備し，回答が終わったら後方の生徒に渡して回答することで，準備や片付けを簡略化できた。

ICT 活用による手応え

- 【教職員】
- ・ 質問項目によっては，生徒の家庭環境等の状況を垣間見ることができる。
 - ・ 取組自体は便利だと思うが，本校では，生徒がタブレット端末を使用する度に配布するので準備に時間を要する。その点が改善されれば，非常に便利だと思う。

伊佐市立菱刈小学校（児童数 81 人，学級数 8 学級，職員数 19 人）

いつ？（When?）

生徒指導事例研修（毎週月曜，職員朝会前の 10 分間）

だれが？（Who?）

各担任，養護教諭，専科教員等

どのように？（How?）

- ・ 各担任がデータを基に，児童それぞれの悩み等について教育相談を行う。
- ・ 教育相談の結果等を基に，「生徒指導事例研修会」で個々の児童の課題について情報共有する。
- ・ 毎朝の児童の心の状態を把握することができるため，生徒指導上の課題を早期に発見し，解決に向けて全職員で組織的に対応することができた。
- ・ 課題としては，毎朝，児童の回答を確認し，聞き取りをする時間の確保ができない日があった。

ICT 活用による手応え

- 【児童】
- ・ 自分の思いを担任に伝える機会となり，担任等が相談に乗ることで，もやもやした気持ちを一人で抱え込まなくてよいという意識をもてるようになった。
- 【教職員】
- ・ 「こころ便ポチッと」のデータを基に，事例を報告することで，担任が一人で生徒指導上の課題を抱え込まなくてもよくなり，職員間の情報共有・連携が取りやすくなった。

伊佐市立田中小学校（児童数 79 人，学級数 8 学級，職員数 19 人）

いつ？（When?） 月初めの職員朝会，生徒指導事例会（毎月第 3 月曜日）

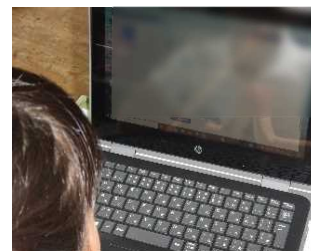
だれが？（Who?） 全職員

どのように？（How?）

- ・ 毎月の各学級の集計を個別にまとめ，児童の回答状況を各学級担任が確認した。
- ・ 心身の状態が「よくない」，「非常によくない」という回答が続いている児童については，学級担任が個別に声を掛けたり，気になる児童を生徒指導事例会に取り上げたりした。
- ・ 1 学期の「学校楽しいと」で課題として明らかになった自己肯定感を高める取組の一環として，「昨日は自分の『いいね』を見付けられましたか。」，「昨日は友達の『いいね』を見付けられましたか。」という設問を追加設定し，自他のよさを見付けることの大切さを価値付けられるようにした。

ICT 活用による手応え

- 【児童】
- ・ タブレット端末での入力ができなかった低学年児童が，毎朝，取組を継続することで，電源を入れ，パスワードを入力し，Microsoft Teams を立ち上げて入力をするという流れを自力で行うことができるようになった。
- 【教職員】
- ・ 入力を済ませたか見届けるために，児童一人一人の名前カードを活用した。毎朝，タブレット端末を活用して入力することを意識付けることができた。



タブレット端末で回答している児童の様子



名前カードで回答が済んだことを確認している児童の様子

伊佐市立本城小学校（児童数 62 人，学級数 8 学級，職員数 19 人）

いつ？（When?） いつでも

だれが？（Who?） 全職員

どのように？（How?）

- ・ 学校独自の質問として，2 項目を追加して実施した。
 - ① 朝，誰とあいさつをしたか。→「友達」，「家族」，「先生」，「その他の人」，「誰にもしていない」
 - ② 朝食の摂取状況について。→「食べた」，「少し食べた」，「食べていない」
- ・ タブレット画面にショートカットを作成することで，児童が「こころ便ポチッと」の質問に答えやすくし，教職員も回答データを閲覧しやすくした。また，校内研修においてドロップダウンリストから特定の児童や学級のデータを表示する方法等について共通理解を図った。
- ・ 全学年統一したアンケートにすることで，集計や比較をしやすくした。
- ・ 回答を確認して気になる児童については，管理職も含めて情報を共有し，共通指導や支援に生かしている。

ICT 活用による手応え

- 【児童】
- ・ 「書く」ことより「選択（ポチッと）」の方が気軽にでき，登校してすぐの学習準備の一部となった。習慣付いただけでなく，パスワード入力も素早くできるようになった。
- 【教職員】
- ・ プライバシー保護の点でもパスワードがあるため，管理がしやすい。
 - ・ データを蓄積することで児童一人一人の生活面や心の変容（状態）が分かり，生活指導や生徒指導に活用することができた。
 - ・ 紙媒体だとデータ化するための作業が必要になるが，すぐに活用できる。



タブレット端末で回答している児童の様子

伊佐市立湯之尾小学校（児童数 55 人，学級数 6 学級，職員数 9 人）

いつ？（When?） いつでも

だれが？（Who?） 各学級担任を中心に

どのように？（How?）

- ・ 児童は朝の会の中で設定した時間で回答する。教職員は、健康観察との相違がないかをチェックするようにしている。
- ・ 学校独自の質問項目として、朝食の摂取状況を尋ねる質問を設定した。実態把握や配慮が必要な児童の支援に役立っている。
- ・ 朝活動もあるので、入力時間確保の方法に工夫が必要である。
- ・ 児童が回答したデータを、もっと簡単に把握できるとよい。

ICT 活用による手応え

- 【児童】
- ・ 自分の心身の状況について表現し、担任から声を掛けてもらうことで、その時々への対応や気持ちの対処について学ぶことができた。
 - ・ タブレット端末の使用に慣れて、早く起動できるようになった。
- 【教職員】
- ・ 児童の体調面や気持ちの面をしっかりと把握し、一人一人の児童に寄り添った声掛けができるようになった。また、個別の教育相談に生かすことができた。
 - ・ クラスの児童の心の変容（週・月単位）を捉え、PTA 等で保護者に児童の様子等を具体的に伝えることができた。

伊佐市立南永小学校（児童数 8 人，学級数 2 学級，職員数 6 人）

いつ？（When?） 毎日、毎週水曜日の職員連絡会

だれが？（Who?） 全職員

どのように？（How?）

- ・ 児童は、1 時間目が始まる前に入力する。「こころ便ポチッと」を「お気に入り」に登録しているため、1 分以内に回答している。
- ・ 回答データを養護助教諭が集約し、担任がそれを確認することで、「気分がよくない。」と回答している児童や「よくない気持ちが継続」している児童に対して担任が話を聞いて指導・支援することができ、早期発見・早期対応に努めることができています。

ICT 活用による手応え

- 【児童】
- ・ 口に出して言えない正直な気持ちを入力することで、伝えやすくなった。
- 【教職員】
- ・ 始まるまでは準備が大変等のイメージがあったが、設定も比較的容易にでき、集約の方法もすぐ共通理解できた。
 - ・ データにすることで、日頃の健康観察では分からない悩みに気付くこともでき、指導・支援に役立った。
 - ・ 「こころ便ポチッと」のデータを共有することで、教職員の連携もしやすくなった。チームで対応する体制づくりができる。
 - ・ 管理職も児童の様子をタイムリーに見ることができるようになったため、養護助教諭や担任と連携が図りやすい。養護助教諭が不在の際にも実態把握が可能となり、効果的に活用できている。
 - ・ 毎週水曜日の職員連絡会では、全職員で指導・支援の共通実践の在り方の見直しをすることができた。



タブレット端末で回答している児童の様子

伊佐市立菱刈中学校（生徒数 130 人，学級数 6 学級，職員数 16 人）

いつ？（When?） 朝の学級活動前，生徒登校時，教育相談（各学期 1 回）

だれが？（Who?） 全職員（管理職，学級担任，学年担任，養護教諭）

どのように？（How?）

- ・ 「こころ便ポチッと」（旧「菱刈中 心の健康観察」）は，当初，不登校傾向にある生徒を中心に活用を始めた。「昨日は主にどこで過ごしましたか。」，「今の自分の気持ちに合っているのはどれですか。（「〇〇さんと話してみたい。」，「何か学習してみたい。」等の選択肢）」，「今日のあなたのエネルギーはどれくらいですか。」という独自の質問項目を設定し，生徒へのアプローチの視点が少しでも増やせるようにした。この取組では，Microsoft Forms にアクセスするための二次元コードをカードにして，保護者の携帯電話や自宅のパソコンからも気軽にアクセスできるようにした。
- ・ 1 年生におけるリモート授業（土曜授業日 3 時間）においては，「こころ便ポチッと」を朝の学級活動の健康観察時に活用して，出席生徒のスムーズな体調把握に役立てた。
- ・ 現在，1 年生 39 人で「こころ便ポチッと」を活用中である。入力作業等，生徒の端末操作の習慣化を図ることができている。

ICT 活用による手応え

- 【教職員】
- ・ 不登校傾向の生徒の「何か学習してみたい。」，「美術，技術・家庭等のものづくりに興味がある。」という思いを知ることができ，学級担任や教科担当と連携して，具体的な関わりをもつきっかけを作ることができた。
 - ・ 「こころ便ポチッと」は毎日，大量のデータが蓄積されるので，「個」の傾向が視覚的に把握できるような工夫が必要である。



タブレット端末で回答している生徒の様子

〇〇さん用 心の健康観察

これは、〇〇さんのような担任の先生や教育相談員に知らせるものです。
このページは〇〇さん専用のもので他の生徒など、他の人に見られることはありません。
もし、このページに入るためのカードをなくしたときは、新しくカードを発行しますので
安心してください。

1. 今日あなたの心と体の調子はいかがですか。

☐ よい

☐ どちらかといえばよい

☐ どちらかといえばよくない

☐ よくない

☐ その他

2. 昨日は主にどこで過ごしましたか？

☐ 自分の部屋

☐ 家族で過ごす部屋

〇〇さんの「心の健康観察」カード

これは、〇〇さんの日々のようすを知る・伝えるためのカードです。
こたえたいことを、こたえられる範囲で教えてもらえたらうれしいです。

右のQRコードを
スマートホンやタブレットPCで
読みとると、〇〇さん専用アンケートが
表示されます。

〇〇さん用 心の健康観察

これは、〇〇さんのような担任の先生や教育相談員に知らせるものです。
このページは〇〇さん専用のもので他の生徒など、他の人に見られることはありません。
もし、このページに入るためのカードをなくしたときは、新しくカードを発行しますので
安心してください。

次への One Step !



- ・ 学校独自の質問項目の設定により，様々な視点からの児童生徒理解を深めることができた事例があった。全児童生徒共通の質問，学級毎の質問，学校行事等に合わせた質問等，臨機応変に設定できることは ICT 活用の利点であるので，様々な工夫を期待したい。
- ・ 回答はデータとして蓄積できるので，学年間，校種間の引継資料としての活用も考えられる。
- ・ 組織としてデータを活用し，チーム支援を推進することで，学校の生徒指導体制の充実ひいては組織力の向上も期待できる。

◇ 引用・参考文献等

【引用文献等】

- 1) 中央教育審議会（令和3年1月26日）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』

【本文】

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf

（2022年11月1日閲覧）

- 2) 鹿児島県「鹿児島県いじめ防止基本方針」（平成29年10月）

https://www.pref.kagoshima.jp/ba04/kyoiku-bunka/school/shidou/documents/62189_20171016203905-1.pdf

（2022年11月1日閲覧）